婦人と子ども

第四卷第十二號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戯、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ケ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年十二月二日印刷
同　年十二月五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區飯田町四丁目十二番地　有久龍一
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園内　フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京　東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

不許復製

會告

本月十日(第二土曜日)午後一時半日本橋區蠣殼町二丁目十四番地日本橋區第一幼稚園に於て例會相開き可申候間御知友御誘引御來會相成り度候也

追つて當日は東基吉君他會員諸君の談話有之筈に候。

會場へは市街電車鐵道の便有之候

十二月五日

フレーベル會

會員御中

婦人と子ども第四卷第拾二號目次

子ども

兵卒フリッツ……一
花賣りの遊び……三
亞米利加の子どもからの手紙……三
虎の子と鬼の子……四
書とき五つ……六

婦人と子ども

幼兒期の衞生と理想の幼稚園……東　基吉譯……一七
育兒と暗示……太田龍東……二八
小供の家庭教育……ミス、ハワード……三七
貞一の日記……その　母……四〇
割烹……石井泰次郎……四四
家庭に於ける所感……飯塚忠次郎……四七
各宮妃殿下御歌……五〇
秋の夜……東くめ子……五五
和歌……湯川たき子……五五
仝……志田ナカ子……五五
はちす葉……すみれ會……五六
フレーベル會俳句端書集……驢野奇峯……五九
新聞紙に見えたる子供の記事……六二
菜食の功……六三
編輯局より……六四
新刊紹介……六六
會報……六七

婦人と子ども

第四卷第十二號

兵卒フリッヅ（つゞき）

やまとの翁

さて、時分時になりますと、お客様は殘らず集って來て、席につきました。其お客様は、前申した様に、みな立派な將校方でありますが、其中に、たゞ一

人、低ひ軍曹が見えて居ますから、お客樣の中には、こんな席に、何故、軍曹の樣な者が出て居るのだらうかと、不思儀に思ふ人もありましたが、しかし、一番、驚いたのは、軍曹自身でありました。

處で、軍曹の次に、も一つ皆が不思儀でならないものがある、夫は、テーブルの眞中にある、白い布を被せた大きな皿であります。皆の考では、何れ、此中には、價の高い、甘しい御馳走が這入ってるに違ないといふので、だれもかれも、何だらう〳〵といふ風に、其方ばかりを眺めて居ました。司令官は、其樣子に氣がついて居ますが、めい〳〵の想像に任したきり、何だといふことは一言も申しません。たゞ其皿を見ては、獨りで微笑として、そし

て、時々、側に居る副官と何か譯あり相に顔を見合はせて居るのです、不思儀がだん〳〵不思儀になって來ました。

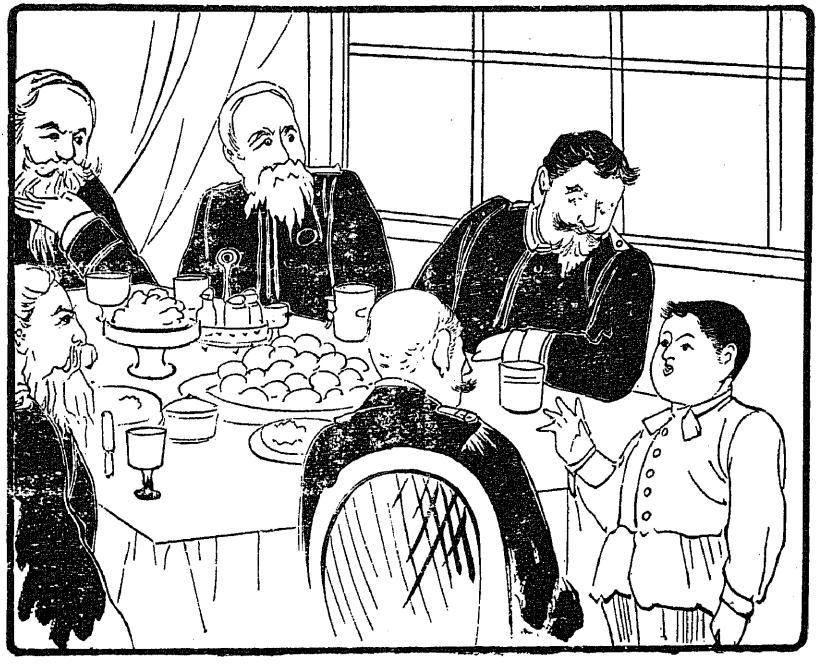
とう〳〵司令官は、大きな聲で、其皿の被を取り去るとを、軍曹に命じました。お客樣の眼は、一時に、其不思儀の皿に集まりました。さあ、何が出たでしょー。皮の儘の馬鈴薯でした、しかも、實に奇麗で、甘し相に見えましたが、夫でも、平常から、美食になれたお客樣たちは、「オヤ〳〵」といったきり、一方ならず失望しました、まさか、馬鈴薯だとは思って居なかったからです。其中で、たゞ一人、心から嬉しかったのは、ボラマン軍曹でありましたらう。

「諸君、今迄はね」と、司令官は、口唇のあたりを、にこ〳〵さ

せながら、話し出しました。

「今迄は、諸君は、我輩のお客であったのだ、然し、此見事な馬鈴薯を食べたいといふ望なら、此處に居る、ボラマン軍曹のお客にならんければならん、これは、軍曹のものなんだから……」

此話を聞いて將校方は。さも不愉快相に、なんだ馬鹿馬鹿しいといふ風に、肩などい



からかして居りました、が、司令官は少しも、夫には氣をとめない様でして、次の様に話しつゞけました。

「然し、諸君、若し此馬鈴薯が、どういふ具合で、此處に來たかといふことがお分りになったら、諸君は定めし、たった一つ貰っても、非常な名譽に思ふに違ない。」

と申しますと、皆は一時に問ひました。

「閣下、夫はどういふ譯ですか、どうして來たといふのですか、どうか聞かして頂きたいもので……」

「我輩に話せといふのか、いゝや、折角だが我輩はとんと話が下手だから駄目だ、然し見た所、諸君といひ、バラマン軍曹も、前から、ひどく不思儀に思って居るらしいから、よし〳〵一つ、こ

ゝに面白い仕方があるのだ　副官　君行って、一つ我輩の話し手を呼んで來てくれ給へ」副官は這入って仕舞ひました、何が出て來るのかと思って、皆一生懸命に、入口ばかり見て居ります。

前程から、パヲマン軍曹の胸は、張りさける程に騷いで居ります。と申すのは、此事について、一寸したらといふ、かすかな疑が、とけかゝり相になって來たからであります。夫で、パヲマンの顏色は、丸で赤くなったり白くなったりして、まあ、どんなに、司令官の眼が、絶にず鋭い注意を以て、自分を見て居るかといふことには、ちっとも、氣が付きませんでした。暫くすると、入口の戸が開いた、そして、副官に隨って、嬉し相にきょと〳〵見廻はしながら這入って來たのは、兵卒フリッヅでありました。

之を見た軍曹は、「オー、フリッヅ」と叫びながら、上官の前だといふことも忘れて、兩手を擴げながら前の方へ飛び出しました。「フリッヅお前、一體、どうして、此處までやって來たのだ」すると、子供は夫には答へもしないで、いきなり、お父っあんの胸に顏をおしつけて大聲で泣き出しました。そして二人の親子は互に抱き合って泣いて居ります。すると將校方も、此不思儀な光景を見て、深い感動に打たれて居る、そして、司令官……親愛な善良な彼の司令官の兩眼には喜の涙が輝いて居ります。

暫くして司令官は、「さあ、いゝ子だ、皆にお前が此處へ來た譯と、どんなにして來たといふ話を聞かして上げなさい、然し、まあ、落ちついて、此卓子の側に座るがよい、さあもっとこっちへ來

て、何も天皇陛下のお側へでも來た樣に遠慮するには及ばぬ、お前の眞實の孝行によって名譽を得たのだ。」

夫から、フリッツが、お父っさんの手を取って、咄をし始めると、將校方は、皆耳を立てゝ熱心に聞いて居ります。聞くに從って、皆の今迄の六ケ敷い樣子がだん〳〵親切相になって來て、其顏色も、だん〳〵和らいで來ました。そして、我兵士の子にお父っあんを慕って何百里といふ遠い道をやって來て、其上、こんなに甘しいものを持ってきてくれる者があるかと思って、もう〳〵嬉しくって〳〵たまらなくなりました。まして、年老った軍曹は、丸で氣でも違った樣に、笑ったり泣いたりして居りましたが、話がすむと、自分の周圍には、どんな人が居るといふことも忘れた

様に、フリッヅを抱いて、いろ〳〵な事を尋ねますと、フリッヅは、一ヤ判明と答へて居ります。

しばらくすると、司令官の目配で、お客さん方は殘らず此室を出て仕舞ひました。そして後には、フリッヅ親子丈けが殘って居ります。やがて半時間もたつと、司令官は、片手に大きな書き物と片手に澤山な金貨の入った袋とを持って這入って來て、

「バラマン軍曹、之をお前に上げる、之はもはや戰爭に出ないでいゝといふ免役狀だ、そしてそれには、お前の一生の恩給も付いて居る。夫から、此贈物は、お前の子供の爲にといって、吾ヤ將校の集めた金なのだから、大きくなって其使ひ道が分るまで、お前預って置いてやるがよい、さ、今からすぐ其子をつれて家に歸

るがよい、かうして連れ立って歸れば、家ではどんなに喜ぶかも知れないだらう。」

「司令官閣下、此御恩は決して忘れません」と、軍曹は低い聲で申しました。「どうして、私はこんな恩惠を得たのでせう」

すると、司令官は嚴かに、

「第一、此度の戰爭中、お前の双びなき武勇と、第二には、先度の戰爭の時受けた負傷……この負傷に依ってお前は一生不具者となった……と、お仕舞には、お前の息子の兵卒フリッツに依って、此度の恩命を得たのだ。

息子のフリッツから推して考へると、お前はきっと、善良な父であるに違ない。して見るとお前の樣な人は、戰場で使ふよりも、

寧ろ家庭に於て父たる役を果させる方が、遙に我が國の爲になると思ふ。どうか、よく氣を付けて、殘りの子供も、皆此フリッヅの樣に、正直で、勇氣のある兵卒フリッヅの樣に育て上げてくれ。そして、フリッヅが大きくなって國家のため、銃を肩にする事が出來る樣になった時は、必らず、忘れないで、私の聯隊へ送ってくれ、これ丈けは、くれぐも賴んで置いたぞ。」

それから、バラマン親子は、此親切な司令官の許を辭して、無事に家へ歸って來ましたといふことであります。

（おしまい）

花賣り遊び

かさな

五六人の子供でも、夫よりづっと澤山な子供でも出來ます、其中の一人が花賣りになって、殘りが買手になるのです。遊びの用意には、いろ〳〵の色の菊の花だの、牡丹だの、梅だの櫻だの、躑躅だの椿だのを造つて置きます。

そこで、大勢の買手が、ずらっと一列か、又はまるく揃って并んで居ると、賣り手になった子供が、赤い菊なら菊を籠に入れて、分らぬ樣に蓋をして、買手の并んで居る前を次の樣に歌つて通ります。

「私は花賣り、赤い花賣りませう。」

ト調 5·5 3 3/2·1 6 6/5 5 1 1 3/2·2 3 1·//
ワタシハ ハナウリ アカイハナー ウリマセウ

しますと、買手は一所に、次の歌を歌ひます。

「私が買ひましよ、その赤い花を」

ト調 5·5 3 3/2·1 6·6/5 5 1 1 3/2 2 3 1·//
ワタシガ カイマショ ソノアカイ ハナヲー

と、歌って仕舞ふと、買手の一番先きの子が、其赤い花の名を言って買ひます。例令ば、「牡丹を下さい」といって見る、所が賣り手の持つてるのは菊ですから、これは間違った。そこで第二番の子が、「赤い菊を下さい」といつて、言ひ當てると、今度は其子が、花賣りになつて、前の花賣りが、買手の一番後に并んで、今度は新しい花賣りが白い花でも黃な花でも、なんでも好きなのを持つて、其色を歌って歩くといふ風にするのです。

亞米利加の子供からの手紙

皆さん、亞米利加のセント、ルイスといふ所には、今萬國博覽會が開けて居て、世界の方々の國々から、いろ〳〵な物を出して見せて居ります。日本からも、澤山出して居ます。其中には、皆さんの樣な學校の子供や、幼稚園の子供のこしらえたものなども出て居ます。夫で、今は丁度、日本が露西亞と戰つて、大層勝ちつゞけて居ますから、日本から出した物といへば、亞米利加人は、格段氣をつけて見て居ます。殊に日本の學校が、うまく出來て居て、皆さんが大層勉强して居らっしゃるといふことも、よく分りましたから、今度の軍さで、日本が勝つのも無限はないといって、感心して居る相です。

所が、京都の高辻高等小學校の西堀ッタといふ生徒の成績品も、矢張、この博覽會に出て居ますが、アリス、ジョーンスといふ亞米利加の子供が、この女生徒の成績品を見て次の樣な手紙をよこした相です。

私の愛する幼き友よ

あなたは定めて御存知ないものからこの手紙に喫驚なさる事だらうと思ひます私はセントルイ市ドージャー學校で第二高等小學校の成績品を見ましたが其内でもあなたのが大變に好いと思ひましたあなたの學校でも今頃は私の學校の成績品をお請取なすつた事と存じます

どうぞ此手紙のお返事を下されてあなたの學校の事やあなたの平生して御坐る事を知らせて戴きたう御座います

今此地には萬國博覽會が開けて居りまして日本

から色々大きな物や綺麗な物が出品されて居ります

若しかあなたが博覽會の何か畫がお欲しいなら何卒云つて下さい

あなたの成績品で見ますれば私とあなたは同じ年齢であります

私は博覽會で此地に來て居る日本の一女子を知つて居ます

さようなれば何卒早くお返事を下さい待つて居ります

アリス、チ、ジョーンズ

日本と亞米利加とは、ずつと前から仲のよい國ですが、殊に近頃は英吉利と共に、仲よくなつて居ます、殊更、先達って、伏見宮殿下が、かの國に御出でになったに付いては、一層仲のよい友達になりませう。國と國とが、この通り仲がよいのですから、兩方の國の子供らも、互に此の通り、仲よくして交際したいものです。

十四

虎の兒と鬼の兒

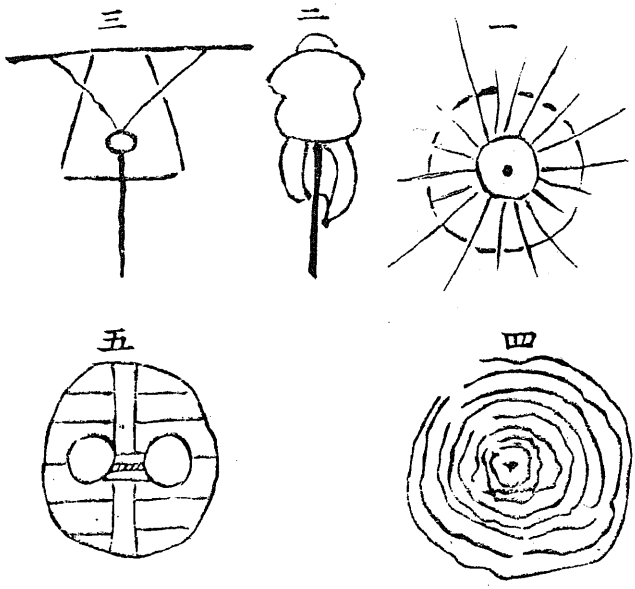
林天然

五月一日九連城の激戰に、我軍の猛烈なる攻擊の爲め、天嶮恃める露西亞軍は、とー〳〵支へかねて、先を爭ひながら敗走しました。其時我軍の捕虜になッたものが、無量六百十三人といふ大數であります。此六百十三人といふ捕虜の中には、老人もあり、極く若者もあり、華族もあり、農夫もあり、商人職工もあり、大盡もあれば貧乏人もあり、それは〳〵實に種々樣々でありましよー。

果して多くの捕虜の中に、一人侯爵家の若殿が

入ッてゐたのです。官は陸軍少尉、歳はまだ二十二で、つい先頃露都セントピートルスボルグの陸軍士官學校を卒業したばかりだといふことです。去る五月十五日に、多くの捕虜と一所に、伊豫の松山へ送られて來ましたが、流石は華族の坊ちやんであるから、品格がよくて、何となく高尚に見えるそーです。で自分より上官の將校共にさえ尊敬せられてゐたから、捕虜になッても我儘で、附添ッてゐる從卒には、隨分ダダを捏るといふことです。侯爵といへば露西亞でも、チヤキ〳〵の方で、定めし平常虎の威勢を張ッてゐたでしよー。其虎の兒が、始めての陸戰に、日本軍に生擒れてしまッたんだから、可憐なものです。

それから忠勇なる我軍は、五月七日に寛甸城を乘取り、越えて十二日の朝まだき、雪裡站から逃げ行く敵の騎兵を攻擊して、傷を受けた、中尉一人と兵士二人を捕えました。此中尉は露國の陸軍大將ホンワリーの子で、もと近衛騎兵の聯隊に居ッたのを、自分から志願して、わざ〳〵西比利亞のコサック騎兵聯隊にはいり、運わるく我軍の虜になッたといふことです、前には虎の兒を捕え、今度は鬼の兒を捕えた。虎の兒の親や、鬼の兒の親が、之を聞いたら、何ゆー思ひをするでしよーか。



畫とき五つ

皆さん、上の畫は何に見えますか五つとも言ひあてた方には正月にご褒美を上げましよう。答は狀袋に封じて今月の十五日までにつくよーに、フレーベル會へ送つて下さいまし。

婦人と子ども

幼兒期の衞生と理想の幼稚園

米國ダブリユー、エッチ、バルン公
東基吉譯

幼稚園衞生の目的は二つに分けることが出來る、其一は幼兒を病敵の攻擊から防ぐこと、其二は衞生思想のいろはともいふべき習慣を發達させる、この二つである。

先づ第一の幼兒を敵から防ぐ方につきていふと、彼のベレーの言つた樣に、誕生當時の子供は、例令ば、難船した船人が、知らぬ他國の海岸にうち上げられた樣なものである。實際生ひ立ちの子供は盲目

で聾である、僅かの反射運動の他は、全身の共同的の運動力を缺いて居る、其唯一の武器として頼む所は、たゞ一づ號泣ばかりである。一言にして言ふと、幼兒は全く助けなき動物といつて宜しいのである更に又近世の科學と一致した形で言つて見ると、例令ばハックスレーの言た樣に、吾人は人間の身體といふものを、生活の戰爭場裡に戰はんが爲めに具備して而も遂に敗れると決つた貝殼の武器と見ることが出來る。幼兒の場合につきて言ふと、所謂此貝殼の武器といふものが、最初の戰爭に於て、容易く敗滅に歸するのである。何故かといふと、幼兒の外敵に向つての防禦力といふものが非常に薄弱なからである。誕生當時、幼兒は、直ちに病毒黴菌に依つて襲はれ易い。フランスのワイルといふ人が、此點に關して、大人と幼兒との區別を擧げた。氏の說によると。

先づ第一に、大人の皮膚は硬い角質を呈するこれが全身の周圍の頑强な堡壘となつて居るのであるが、幼兒には此樣なものがないのである。初生兒の皮膚には此角質を存しない。而して破損し易くして、且つ脂肪質の被覆もない、此相違は最初は極めて輕微な要點としか見えないが、これがやがて、幼兒が或る病毒に侵され易いことの說明になるのである、先づ試に近頃の保育所(佛語 Crèche 獨語 Crippen にして二才位の幼兒を預りて保育する所)へ行つて見ると分る。そこでは極めて嚴格に衞生規則が守られて居るのであるが、夫でも尙いろ〳〵の皮膚病患者い夥しいのに一驚を喫するであらふ。これは、つまる處、幼兒の皮膚の傷つけられ易いのに依るのである、尙大人の皮膚は幼兒のに比較して毛孔の入口に

毛髪の保護がある、或種類の殺菌の効ある粘液の塹濠がある、而して角質の表層のより強い抵抗があるのである。

さて、或病毒が皮膚の損所から内部に這入たとすると、更に皮下に於て第二防禦線があるのであるが、こゝに於ても、幼兒の防禦は大人のに比して遙に薄弱なのである。

次に病毒が皮膚の抵抗と、皮下の防禦線とを破つて、中に這入つたとすると、今度は更に二つの道を取つて奥深く侵入することになる。其一は血液で、も一つはリンパ腺である。そして此二つの道に横たはる所の妨害物は又年齢に依つて餘程相違がある。

(一)一體血液は、大人の時よりも、子供の時に於て甚だしくアルカリ性である。故に子供の時の血液は黴菌の作用に對して遙に抵抗力が少ないのである。ジェコップといふ人の實驗に依ると、大人の血液を中和するに、五十乃至六十倍の酒石酸溶液を要するけれども、子供の血液には四十倍しか要しないといふことである。

(二)ワイル氏に依ると、血漿の殺菌力は大人に比して幼兒は遙に弱い。

(三)血液の白血球は、又傳染に對して防禦力を有して居るのである。そこで、此白血球の中でリンフォッツといふ分は殺菌力がなくて、リューコッツとフワゴッツといふ細胞は殺菌力を持つて居る。所で、大人の血液で見ると、殺菌力のないリムフォッツ又は、全白血球に對して百分の二十三の割合で含まれ

て居るが、生後一年の幼兒では、百分の五十から六十までを含んで居て、夫が第三年になると、百分の卅九に減じ、八歳から十歳までの子供になると百分の二十九になる。所が又一方の殺菌力を持つてるリューコシッツ又はファゴシッツの方は、大人だと、百に七十の割合であるが、誕生當時の子供は僅に二十八で、夫が一年の終に四十となり、三歳の時には五十四となり、八才から十歳に至つて六十四となる勘定である。之等の數は、カデー、ワイス、リーダー、其他有名なる人々の觀察の結果明になつたのである。かくの如く強力なる防禦軍たる殺菌性リューコシッツは、哺乳兒から見ると、大人の方が二倍も多い夫から、子供の方で見ると、大人と較べて反對に中性的リューロシッツが三倍も多いのである。

次に病毒がリンパ腺を經て、侵入する場合をいつて見ると、此場合に於てのみは、子供の時の方が大人よりも抵抗力が強い。リンパ腺の活動は、概して言ふと、大人の時よりも、子供の時の方が盛な樣だ。ワイル氏の言つた樣に、凡べての點に於て防禦力の弱い子供は、つまり防禦の凡べての方便を、このリンパ組織に集中して仕舞つて居るらしい。

(四)病毒が以上の防禦線をうち破つて、更に筋肉組織内に這入つた時に、幼兒の身體は、大人に比して更に弱い。といふのは此時分は、子供の發達力が非常に強くつて、營養の多量は、他の組織を築造するよりも大抵骨格を築造する方に費つて仕舞ふからである。

以上述べた如く、幼兒は格段に傳染し易い傾きがある。病毒に抵抗する凡べての防禦力が大人に比し

て遙に劣つて居る。故に幼年なほど、病毒に侵され易くつて、又危險である。これは、事實で以て證明することが出來る。パヴリアで集めた、傳染病の統計で見ると十万人の中百日咳で死んだ者が五十八人から七十五人であつた。そして其死者の百分の九十九、六が十歳以下の幼兒である。夫から、麻疹で死んだ者の中、百分の九十七、ジフテリア死亡者の百分の九十一、猩紅熱死亡者の百分の九十、之等は皆十歳以下の幼兒であつた。

麻疹には、子供は最も傳染し易いものであるが、之はそう危險な病氣でないといふのが一般の說である。少し年のいつた子供とか、注意の行き屆いた家庭では、殊更そうの樣だ。然し、五歳以下の幼兒に在つては、寧ろ危險な病氣なのである。近來、死者の著るしく減少したにかゝはらず、パリでは、年々此病氣の爲めに一千人から斃れるといふことである。即ち、千八百九十五年、パリに於て麻疹の爲に死んだ者が、十万人につき二十六人の割合で、ロンドンでは、同じく五十九人、ベルリンでは十五人、并ーンでは四十五人といふ割合であつた。又千八百九十六年、和蘭では十万人につき廿四人の割合で此年は猩紅熱やヂフテリアで死んだよりも遙に多數であつた。又ミュンヘンでは千八百八十八年から仝九十五年の間に於て、麻疹の患者が二万八千九百八十八人あつたが、此中千〇七十七人までは死亡した。

生れて一年の時の場合をいふと、大抵百につき二十一人までは死ぬ。そして二才から五歳までの中だと、死者が百につき五の割合になり、六歳から十歳までの間だと、ずつと減つて百につき四分の割合に

なる。だから、幼稚園時代の幼兒の間に、此病氣が流行すると、百人中四人か五人までは死ぬといふことになるのであるが、若し小學兒童の時代だといふと千人中死者が四人位といふまに減ずるのである。

次に百日咳につきて言ふと、此病氣の爲に死んだ數の百分の九十九以上は十歳以下である。夫で獨乙では、此病氣を頗る危險な傳染病といふことにして　昨年內務大臣は百日咳を幼稚園へ出ることの出來ない病氣の中に加へることにした。

かく幼兒の身體は　誕生後さまゞの外敵から包圍せられて居つて、其防禦力も頗る弱いのであるから、　幼稚園の樣な多數の幼兒の集まる處では、之等の傳染病を防禦する手段につきては極めて愼重の注意を要する。

更に又、幼兒の神經系統に至つては、其保護が頗る薄弱である。誕生の際、子供の中央神經系は尙熟して居らず、また發達して居ない。幼兒の腦は成長の期に屬して居つて　非常な速度で發達しつゝある故に此際腦を刺戟することや、早熟の發達をやらせる樣なことは余程注意しなくてはならぬ。幼稚園の手技などにつきては、十分此神經系統の衛生に注意してかゝらねばならぬ。夫で又、いろ〳〵興奮的の談話や、遊戯で絕にず幼兒を刺戟することは、大に考ふべきだと或醫者はいつて居る。一體此時期の幼兒の心意は　絕えず新らしい力を要求しつゝあるので、頗る活動的である、夫だから常に早熟の危險がある。道德の發達といへども早熟は危險である。之につきてはフランスのルッソーが、早熟的に得られた

各種の道徳は寧ろ罪惡の種子を播くものだといつた言葉に眞理を認めねばならぬと思ふ。

此點からして、私の原則とする所は、幼稚園の手技其他は、よく幼兒の興味に適すると同時に、刺戟が少なければ少ない程宜しいといふことである。

只に幼兒の神經系統に向つて刺戟の過度なることを避くるに注意すべきのみならず。更に飲食、睡眠消化、仕事と休息、注意と自制等に關して健全なる活動の習慣を得しめねばならぬ。更に又幼稚園幼兒の眼に向つては、過度の刺戟を避けねばならぬ。夫から四歳位の幼兒の音聲は、ガルビニ氏の周到なる研究に由ると、殆んど六調子の範圍内に在る。所が幼稚園唱歌の中にて、氏は此幼兒の音聲の範圍を超えたもののあることを見出したといふことである。殊に合唱の時に於て、其唱歌が、少くとも最初に於て、六調子以上の音であると、音頭を取る人に從つて唱ふには餘程骨が折れるといふことを見出した。

次に此時期の終はり頃に於て、幼兒は丁度齒の拔け變る時になる。そして六歳には牙關の生へることになるが、七歳になると、之を失ひ易いのである。此點につきては一般に、忽にして居る樣に見える。大抵の親達は、此六歳の時の牙關は、一時的の齒だと思ふて氣をつけない、其結果として、大人になつて、四本滿足に揃つて居る人は實に少ないのである。ドクトル、ガロップ氏の説に依ると、二十五歳以上の三千人の米國人の中で　此六歳の時の牙關を有する人はたつた七人しかなかつたといふことである幼稚園の保姆は、少しく子供や、かつ母さんたちに向つて注意してやれば、容易に此齒を滿足に保存さ

せることが出來やうと思ふ。

そこで衛生學の上からいふと、幼稚園、幼兒の健康に向つて、三個の要求すべき事がある。第一は保姆たるものが、學校衛生の要點に通曉し、且つ、多少小兒科の知識を要するのである。勿論保姆は乳母ではない。然し乳母的修練を得て置くことは、確に此事業に必要である。第二は、幼稚園では十分なる健康診斷をやらねばならぬ。そして幼兒の入園は、必らず醫師の診斷を受けてからにし、又入園後も絶えず時を定めて診斷をすることにすること、第三は、幼稚園の周圍は必らず衛生的で保育の方法は十分衛生に叶ふ樣にせねばならぬ。

そこで、理想の幼稚園は、戸外のものに限る、私の考へに依れば、抑々これがフレーベル氏の最初の計劃であつたと思ふ、而して近世の衛生學の要求する所に一致して居るのである。戸内でやる最良の幼稚園といふものは、單に都會生活と、烈しき天候との急需に應ずる爲めの一時的方便たるに過ぎないのである。そこで、此の如き幼稚園に於ては、清潔といふことに十分注意せねばならぬ。塵埃はバクテリアを運ぶものであるから、この塵埃をなくすることが極めて必要なのである。カーネリー氏とフヰツギー氏との研究によると、子供が小さければ小さいほど空氣中に於けるバクテリアの數が多いといふことである。これは蓋し小さい子供ほど不潔になり易いからであらふ。此結果からして、バクテリアの數を減ずる爲めに、十分なる換氣法を講ずることが必要な譯である。

近年に至つて、最良の幼稚園に於ては、最も深く衛生法に注意を拂ふ樣になつた。此實際の理想的幼稚園は……と吾人が言ひ得るとして……極簡單にいへば次の如くであらふ。保育室は廣くつて、換氣が十分で、平坦で、且つ簡單であつて、毎日奇麗に掃除されて居ること、而して壁はなるべく塵埃をためない樣に、張付け物や裝飾物をなくし、且つ日々掃除されねばならぬ。夫から、黑板は低くして室の周圍に廻らし、卓子は凹字形でなくて矢張り通例の學校の樣に并べて、光線を側から受ける樣にし、一人も前からは光線が來ない樣にする。そして机の上には凹んだ罫などを引かないこと、又幼兒には各自の用ふるコップを一づゝ備へてやつて、タヲルなども、同じく一人に一枚づゝ持たせる。

まあ、こんなに周圍の事情を完全にしても、保姆は尙十分衛生に注意してかゝつて、そして矢張り多少乳母の心持を要する。夫で、今まで言つた所の大體を尙一つ具體的に說明して見ると、例令ば、此處に或幼稚園に五十人の幼兒があるとする。所が、凡べて、之等の幼兒は、皆病毒傳染に對しては甚だ弱いものである。そして大體四十人までは大抵齒が揃つて居る、所が若し六歲の幼兒が其中に二人か三人あるとすると、此子供等は今丁度齒の拔けかはりの時であつて、彼の六年目の牙關を得つゝあるのである。そして二十五人から卅人までは遠視即ち未發達の眼である。五人から十人までは、一方の耳か又は兩耳ともに缺陷がある。多分五人位は、頭の大きすぎるのがある、之は腦の攝養に關係するのである。それから、男兒か女兒か一人は、口訥がある、數人は夜夢襲はれるものや、ヒステリー性のものや、其他の

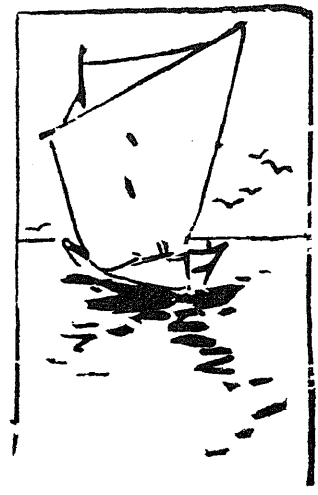
神經的病性のものがある。以上の如きは何れの學校にも見る所で、教育者は決して輕視してはならぬのである。

幼稚園衛生の目的は、何を置いても先づ、幼兒を疾病と死とから救ふこと、も一つは健全なる活動の習慣を發達せしむることであつて、これは主要なる目的である。從順（これは全く健康の習慣を得させるといふ中に含まれるが）を除きて一切他のものは、此の二の目的から見れば後に回はして宜しい。此時代の幼兒の發達の程度に於ては、決して家庭の任務と學校の任務とを斷然分つことが出來ないのである。そして兩者の目的は共に衛生上の目的でなければならぬ、一體からいふどこのことは、實にたゞコンモン、センスに過ぎない。例令ば子供の時に過度な使用を禁じて、夫がために兩眼が助かつたとすると子供に取っては、讀書の技術を得たのよりは遙に價があるといはねばならぬ。大きな筋肉を全体健全に發達させることは、細かな技術に巧みになるのよりは餘程重いのである。

若しも、子供が讀書や、算術や、幾何や、其他編み物の如き手藝を學び得なんだとしても、大きくなつてから、其他の術を得ることも出來よう。然しながら、一朝、此時代にかゝり易ひ傳染病にでも侵されたとすれば、即ち大抵は死ぬのである。若し又、飲食、睡眠等に關して衛生的習慣を得て置かなかったならば、これは後年に至つて得ることが、殆んど不可能である。若し第六年の牙關を失つたならば、これは、後年二度と得ることが出來ないのである。此の如きは、實に衛生法の使命である。

吾人の聞く所に由ると、世界の人類の中で幼稚園の始祖（フレーベル）の樣に、子供の健康につきて氣を付けた人がないのである。夫で、吾人が、此處に幼稚園の根本的目的として、殊に衛生學と普通心理學の示す點を擧げて、幼兒の身體を病敵から保護し且つ健全的活動の習慣を發達させ、從順を得しめ、且つ社會道德の萌芽を培養するに在りといっても、強ちフレーベル氏を辱しめる譯であるまいと思ふのである。

以上は本年七月一日米國セント、ルイス市で開かれた教育大會の幼稚園部會での演說の筆記である。至極有益で、大に吾人の意を得たものと考へたから、此處に譯載することにしたのである。



育兒と暗示

太田龍東

近頃、世上に於ける惡癖惡習慣は、だん〳〵增長して遂には之れが爲めに、罪惡を犯す者が日々に多くなつた樣に思はれる。而して彼等は、この惡むべき罪を犯しながら、其罪を屢重ぬるに從つて、さほど惡しき事とは思はない樣になる。のみならず、其殘忍酷薄なる行爲を以て一種の快樂となすに至るのである。玆に至りては、父母の慈愛も敎育者の薰陶も、又宗敎家の敎も何の役にも立たない事になる。これも其初は、極く些々たる一小癖が不知不識の間に習ひ遂に性となり、かく長ぜし事なるを思はゞ、實に驚くの外はないではないか。

そこで、この最も恐るべき惡癖をかく增長せしめない樣にする策を講ずる必要が起る。先づこの惡癖を矯正する任に當るものは果して何人であらふか、言ふまでもなく、父母敎育者等に相違ない。其內最も力あつてあづかるものは、母親其人である。

予は、其責任者たる父母敎育者、殊に母親が兒童を養育するに當つて、最も困難なる惡癖惡習を矯正するに、所謂暗示法なるものを應用せられんことを望むのである。この育兒上に暗示法を用ゐ

る事は、西洋諸國に於ては、近來教育家醫學者の唱道する所であつて、其効果の無害にして有益なる事は、諸大家の實驗のみならず、予が經驗に徴して深く信じて疑はないのである。

然らば其の所謂暗示法なるものを、育兒上に如何に應用すれば可なるか。是れ予が將に說かんとする所である。而してこの問題を說明するに當りて、暗示とは如何なるものであるかを說くに必要があるから、先づ暗示の意義より說明しよう。

暗示の意義

暗示とは、英語の「サヂエスチョン」と云へる譯語にて、羅馬の「サグヂエレ」即ち歸伏せしむる又は告げ知らしむる等の意を持つてゐる語から來たのであるが、今では原語の外に他の意義を有する樣になつた。

暗示の定義については學者によつて種々唱へられるが、其重なるもの、一二を示せば、ボールドキン氏は「暗示とは、外より不意に意識内に入ることによりて生ずる現象の一なり」と云ひ、ビネー氏は「暗示とは、人を觀念によりて影響する事である、暗示の結果は觀念構造の結果である」と云つてゐる。

この暗示は催眠術應用に於ては、甚だ必要なものであつて、催眠術の骨髓とでもいふやうなものである。かの催眠術は只人を眠らすまでゝあつて、病氣などを治療するのは、皆暗示の力で治療するのである。（催眠術と暗示とを混合すべからず）

暗示は螢に病氣をのみ治療するばかりではない、廣義に於て言へば、吾人日常生活を支配する一大原則であると云ふ事ができる。かく言はゞ不

審をいだく人もあらふが、決してそうではない。何人に限らず、一旦ある他の觀念が其精神中に侵入する時は、初めはたとへ夫れに多少の反抗する念があるとも、其觀念は直ちに其人の全精神を支配すると云ふ事は、心理學上爭ふことの出來ざる事實であつて、又多くの學者の認むる所である。

この暗示を行ふときは、右にいへる如く全精神を支配する事を得る故、之れを行ふ人の意志如何により、種々の現象を呈することができる。實際此所に存在せざるものにても、其人をして之れある如く思惟せしめ、又平常己れの信ずる事の出來ないやうなことでも信用せしめ、又普通の教育法にては教育し能はざる程の大惡癖あるものでも、其人をして悔悛の心を起さしめ、又醫師が多年治療することの出來ない難病にても、立どころに恢復せしめ、其他風俗に於て、習慣に於て、流行に於て、其の善にまれ惡にまれ、人々相互に影響する上に於て、暗示は實に驚くべき効力を有してゐるものである。之れは催眠術に於て多く其効を見る。

この暗示の影響は、日常の生活に於て容易く觀察する事が出來る。例へば人ありて、年若き女に向ひ、「貴女は面が非常に今日は赤いですね」と云へば、少女の顏は實際に於て赤くないのであるが、やがて其顏面に赤色を呈するは、往々見る所である。又ある人が酒の話をなせば、好酒家は喉をならし、其他美味の話を聞けば何人にても唾を流すが如きも、吾人のよく見る所である。

凡て此等直接的反射運動の頭腦より來たるものは意志作用を假らずして生ずるものであつて、皆一

種の暗示の結果に外ならない。

暗示を其原因より區別すると他人より與へられたるもの、外物より暗示せられたるもの、自分の觀念より生ずるものとの種別がある。

今ビ子ーと云へる人が話した面白い例が一つある。

或る所に屠者があつて、重き獸肉を其頭上にある鈎に懸けやうとして過つて之れを滑らし、爲めに自身の腕を捕へられて、獸肉の代りに其身体をかけた。傍にゐた人々は大に驚き、直ちに之れを鈎より取り下した、其時屠者は既に半死半生の有樣で、しきりと呻き聲を發して、さも大怪我をなしたるものゝやうであつた。醫師を招き其身体を檢査せしに、一の負傷だに生ぜず他に何等の異狀をも呈してゐない、それに屠者は今も死ぬ樣に呻吟してゐる、不思議であるからよく調べて見れば唯屠者の袖に鈎が刺されたのみにて、何の傷をもしてゐなかつたと云ふ事が知れた。云々

畢竟この屠者の如きは、特にある人からの暗示によらず、外物から負傷の觀念を構造せられたものである。

要するに、暗示とは外より觀念を生せしめたものである。この暗示を有效ならしむるには、先づ外部感覺に刺激を與へて印象を呈せしめければならぬ。この印象から觀念となり、其觀念發達してある影象となり、其影象は更に感覺作用を復起せしむるのである。

暗示法

予は暗示法を說くに當り、兒童の癖と云へる事

に就き一言して見よう。

第一、寢小便。親の最も困難するは此寢小便である、この癖は、兒童熟睡の時不知不識の間になすものであつて、之れも兒童に特有なる一種の神經病である。括約筋の弱つてゐる爲めに、麻痺の形狀に於て現はるゝ事もあるが、多くは種々の事情に刺戟されて反射的に起るものである。又心的事情か原因となる事もある。此等は暗示で矯正する事が出來る、而して此心事的事情についてリンギール氏は左の如く云てゐる。

（イ）、患者自身の心配＝兒童が寢小便する事を父母より責めらるゝを心配し、遂に繼續暗示となり實際小便を惹き起す事がある。

（ロ）、熟眠の度を過せしもの、＝これは餘り熟睡を深くせし爲め、小便するにも氣附かずして、放尿するもの、

（ハ）、感覺の鈍くなるもの、＝寢小便患者は、小便に對する臭氣の感覺が次第に鈍くなるものである。

（ニ）、冷える事、＝冬の如きは普通の人にては小便の度數は增す故、或兒童は冷氣の爲め之れを病むに至る。

第二、ねぼける癖。小兒が「ねぼける」原因は種々あるが、寢る前に强く感情を刺戟するとか、又健康狀態が變するとそれが誘因となつてゐる現象を呈し、又食物が不消化物であるとかすると、小兒は「ねぼける」事が往々ある。尙ほ之れが全く癖になつて、何も原因なくとも「ねぼける」やうになる事があるから、育兒者は大に注意せねばならない。

この外嘘をつく癖　爪を嚙む癖、盜む癖、よく

泣く癖、學校を嫌ふ癖、鼻をいぢる癖、陰部をいぢる癖等、枚擧に遑あらざる程である。此の諸癖は幼稚の時に矯正しないと、追々增長して遂には社會を害するやうな事になる事もあるから、氣がついたら早速防止するがよい。之れを防止するには所謂暗示が最も效力を有してゐる。之れより進んで暗示の法式を說明する。

暗示の法式に二通りある。第一は覺醒時に行ふ暗示の法式で、第二は睡眠時に行ふ暗示の法式である。

第一、覺醒時に行ふ暗示

之れは、人の覺醒せる時、即ち意識の活動中にあつて、惡難を矯正する目的を以て行ふ暗示にして、父母敎育者等の應用して大に效あるものである。凡そ習慣により、惡性となれるものにても、傳記史記等にある美談の實例などによりて、忍耐勉强は後に大幸福を得る基であるとか、又有德なる美談等を、中心としたる種々の暗示的敎訓により、完全なる善品性となす事の出來るのは、爭はれない事實である。

今左に參考の爲め實例を擧げて見よう、

ある經驗を有せる敎師が、十歲の惡少年を矯正する爲め左の話をせしと。

ある畫工が、美しき小供の畫を寫さうと思ひ、多くの寫眞の中から、世界一番と思はれる程、無邪氣で其上美しい愛嬌溢るゝ如き人相をした、小學生徒のを一枚探し出した。其次には、前と反對に極く大惡無道なる人の畫を寫す考へで、世界中第一の大罪惡漢と云はれる人相をしてゐる寫眞を探し出した。所が實に不思議なのは、この最も惡む

べき大罪惡漢は、先きに探し出した所の、彼の最も愛嬌ある無邪氣な相貌を持つてゐた、小學校生徒と全く仝一人であると云ふ事である。何んと嘆ずべきの至りではないか。世界でも一番愛らしいと云はれる程の美少年が、世界中第一の惡人と思はれる程の人相と變ずると云ふのは。彼の美少年も其初は顏面の如く、清々とした心であつたに相違ない。それが一度惡心を起し、屢々罪惡を重ざぬるに從つて、其面相も心と共に獰惡と變化し、遂にはかくも見るさへ惡むべき人と成り果てたのである。何人でも、心中にある善惡は、其行ふ度數が重なるに從つて、善或は惡の相が、其表面に顯はれるのである。今汝の容貌を見るに、何となく惡心を抱いてゐる樣な相貌が表れて居る。故に汝に今の內に其惡心を改め、善心に歸らずば遂には二番目の寫眞の如き惡相の人となり。社會の人に惡まるゝ樣な人間になるぞよと。繰返し〳〵教訓せしに、十才なる少年は、全く善良なる少年と變じたとのこと。

又ある殘忍酷薄なる少年があつた、それで次の談をして聞かせた。

昔ある國の王樣が、從者を連れて百姓の裝束で民間を密行された。所が食事する事が出來なかつた爲めに、王樣も從者も大に餓えたのである。其時恰度金滿家の前を通り合した。そこで主人に一度の食を乞ひしに、主人はメンドーだからとて、之れを斷つた。仕方がないので二人は餓えた腹を抱へて、この度は、極く貧乏な百姓の家に入つて一飯の食を乞ふた。すると今度は主婦が厚く之れを招待し、後にも先きにも一片しかない、パンと

肉とを出して之れを二分して與へた。やつとの事で二人は、餓を凌ぐ事を得たでの禮を述べて其家を去つた。後で主婦は聖書を讀まんとて傍を見しに、一封の紙包があつた。之れを開きしに、汝に二千圓の賞與を與ふる故、宮内省に申出でよと書いてある。主婦は何んの事やら解らないが、ともかくと思つて申出でた。出頭して見ると、豈圖らんや、夜前の旅人の百姓は、國王であつた。つまり二千圓を賞與金として下された。云々

此話を聞いた少年は、今迄の殘忍酷薄なる心を捨て、慈善に富める少年と一變したと云ふ事である。

如斯話を、巧妙に教師或は父母等が、兒童に教訓的に談話したらば、必ず其効はあるに相違ない。彼の僧侶が、説教なすも畢竟之れと同一主意である。

この外、惡戯の小供あれば之れに向ひ、惡戯の小兒が遂に天罰を蒙りて變死し、善良なる小兒が神の保護を受けて天災を免れし事を話し、其後に惡は罰せられ、善は賞せられしを説かば、遂に惡戯を改む樣になるのである。

第二、睡眠時に行ふ暗示、

この暗示は自然に睡眠せる時、又は將に睡眠せんとせる時に用ゆるもので、第一の覺醒時に於て行ふ暗示よりは、遙に効果は大なるものである。佛國にて有名なるファーレー博士は、之れを熱心に研究し、其實驗上より報告して、睡眠中の暗示的矯正法を精神病者に施こせば、偉大の功を奏するものだと云つてゐる。又其前フロワー博士が研究して大に世人の注目を引いたこともある。予も

此點については實驗せしことがあるが、フロアー博士の言は決して偶然でないことが解つた。世の諸賢母よ、之れを實際に試みて其効の大なるを知り給へ。

之れにつき「ドクトル、リロン」氏が其實驗より得たる法則なりと云へるものがあるから記るす。

若し兒童の稟性に鈍きもの又は怠惰なるものがある時は、催眠術を施さずして、暗示を用ゆるが一番である。兒童をして深く己れを信用せしめ其機を見て、其前額に手を當て、丁寧熱心に吾思ふ所を暗示せよ、若し又其兒童が甚だ執拗にて性惡しきものならば、之れを加ふること屢々なる時は、如何なる場合にてもよく成功して、兒童の惡癖を矯正し溫良勤勉ならしむる事が出來る。

之れにて其一斑は伺ふことができる。尙ほ二三の例を擧げて詳かにせう。

睡眠中の諸癖中寢言を云ふものゝ矯正法につき話さんに、本人が睡眠前に「今夜、吾は決して寢言は言はない」と、自ら數度胸中にて繰り返して寢につかすがよい。（これは所謂自己暗示なるもので、時によればこれのみにても其癖を治することができる）かくて睡眠せば、母親（これをなす人は母及び乳母の如く兒童と共に寢るやうなものに限る）は「今夜から汝は決して寢言はいはない」——「寢言いふ子はいけないのですよ」——「汝はよい子だからもう寢言はいひませんね」などの如く暗示を與へるのである。時によると眼を醒すことがある。其時には「汝はよく眠ますね」——「眼をさますではありません」——「妾のいふことを眠りなから聞くのです」と言ひきかして眠らすので

ある。予は實驗したるに如何なる兒童でも、よく寢るものである。其實驗を左に、

三歳になる小兒、夜ひるの別なく始終母の乳房に縋り、夜は特に乳房を口に入れなければ決して眠らないと云ふしまつ。そこである夜、(之れは予が傍に居て母をして言はしめた)子供の將に眠らんとする時、子供の耳に母の唇をあてゝ

「汝はお母さんの乳を何時も縋つてはいけない」

「あんなに乳をいらふと乳は呑ませませんよ……明日から決して乳房に縋るではありません」

尙ほこの外其不心得を懇にとき、命ずるが如く諭すが如く、ごく熱心に暗示した。

ところが、翌朝其小供は、母の乳房に以前の如く縋らない、故に其夜も前夜と全樣に暗示した。それで全く其癖は止んでしまつた。

其外厭な夢を見る癖、うなされる癖、鼾をかく癖、口を開いて眠る癖尙ほ第一の覺醒時に行ふ暗示の場合に擧げたる諸癖及び、諸習慣は多くこの暗示法で矯正する事ができる。それらは前述せし所を以て推察するに足ると思ふから、茲には述べない。

(完)

小供の家庭教育 (承前)

(ハワード孃談話)

○獨立の生活　世界各國の婦人中生活のために働くことでは英國人に及ぶものは有りますまい、身分のある人程生活の爲めに働き妻君たるものでも決して良人に計り賴寄つて居ない、夫れから女子を教育するには必ず獨立して生活し得るやうな方法を講ずる、先づ將來獨立する爲めの第一は何

んであるかと云ふと料理法です、夫れに次いで裁縫、圖畫、看護法、音樂之れ等は是非女子に修養させべき手藝として肝要なものヨシ父親があるにもせよ早く他へ嫁がないものは自身で生活する、決して成長した婦人を遊ばして置くと云ふ事はしないのです

○手藝の教育　英國では女子に必ず手藝の教育を施しますから卒業した上は夫々社會の需に應じて働き決して何時までも親に養つて貰ふ事を望みません夫れ故嫁入の支度でも親の世話にならず自分で調達するし中には充分の貯金もあり財産も出來て嫁入りします夫れ故一朝不幸にして良人に死別れる樣な事があつても路頭に迷ふ抔い事は滅多にありません立派に生活を立てゝ往かれるから手藝は女子に取つて尤も大切な事と思はれます日本でも近頃は女子教育に重きを置かれ手藝を教授する學校もありますが之れは誠に喜ばしい事、私は世界各國の婦人に向つて手藝の教育は熱心に御勸め申したいのであります

○家庭と手紙　夫れにモ一つ女子の教育上大切なのは家政學です家を治める事を知らなかつたら女子は家庭に不必用な者となりましやう樂しき家庭を作るも不愉快な家庭に終るも多くは女子家政の能力如何にある事ですから女子は殊に注意して研究されん事を望みます且つ一生の間には思はぬ不幸を來すことがあり何んな零落に陷ゐらぬとも限りません此場合に當つてヨシ婦人に獨立の生活が出來る丈の手腕があつたにしろ家政の道に堪能でなかつたら一家を貧苦の淵より救出す事も出來ず遂には内助の功を空しくして面白くない家庭に

日を送らなければならない之れでは婦人としての天職を盡す事が出來ぬ斗りでなく此上もない女子の不面目と云はなければなりません猶家政と共に是非研究して頂きたいのは手紙を書く稽古です之は男子の忽せに出來ぬと同じく女子にも必要なことで西洋では特に練習させます、事理も分るやうに、手蹟も美事に早く認めると云事は美德の要素です

○料理法　女子の手藝として料理法に重きを置しは獨立の生活を圖る爲の手段計りではない料理の趣味はナカ〳〵面白い者で殊に一家の妻君となつた時家庭に於て直ぐに必要を感ずるのは料理であります衞生料理の關係ある事は申す迄もないが、愉快なる食事の時間を作るのは全く料理の興つて力ある事です從て家庭も面白く圓滿に斯な樂い事は有ますまい其他惡い事を願うのではありませんが病人のある時拵料理法に詳しくなかつたら非常な不都合を來すでしやう、料理と云つたつて唯旨く煮る計りが能ではない、料理に作る原料の善惡から素質の成分を研究して之れは病人に適する食物か不適當な料理かと云ふ事の區分鑑別が出來るやうでなければ料理法に詳しいとは云はれません、斯の如くして料理された食物は必ず病人の救けとなつて病の恢復も早い……料理をすると云つたつて始終臺所へ入つてる譯ではありません……未だ家庭の談話は澤山ありますが後日を期してお咄し仕ましやう(了)

貞一の日記（拔萃）（明治卅六年五月卅一日生男兒）

その母

九月十三日　半間ばかり、手放しにて歩む。
便通四回
食事　粥一膳一回、乳、おもゆ、三回　葛湯一回　睡眠　十二時間
九月十四日　下痢七回もあり　熱は卅七度六分ばかりある故　例の醫師の診察をうく　食事も睡眠も前日に變らず。
九月十五日　醫師の注意により、母乳を廢し初めんと、夜ねむる時のを與へざりしに、中々むづかしく、ばあやに負はれて泣く、父も書齋にてもり居られず　抱きて室内をあるきまわり、やう〳〵ねむらす。
便通四回　色少しよろしけれど粘液まじる。

食事　桂の霜一回　玉子湯おもゆ四回　乳一回（夜半）食慾少なし
睡眠　十時間
九月十六日　都合により　例の醫師を見合せ某醫學士の許に行く、母に抱かれて車にのれば　大喜びにて元氣なり、藥をもらひて歸る時　オッキ〳〵といひて　瓶を指ざす　午後より　和倉温泉に行き　二階にて遊び衣類を入るゝ籠を座敷中おしまわり　どこでも行きあたれば、その壁、こゝの唐紙を叩きておこる、下痢五回水分多く粘氣あれども、元氣は中々宜し。醫藥の功少しも見えねば、或は食物の轉換を要することもやと醫と相談す。
食事　桂の霜（二盃）一回　スープ一盃　四回
くづゆ一回　乳一回

睡眠十一時間
腰湯四回

九月廿五日　齒はときけば　齒を指し　父さん母さんも　きけば指さす。

九月廿六日　余り下痢長くつゞき　醫藥の　効驗も見えぬ故　父母種々心配の結果　小兒科には老練の名ある、神田の小原賴之氏の許に行き診察を乞ふ　乳は廢する方よろしとの事に　夜半も飲さず　父起きて世話をなす　食物は　おしつぶし麥を　盃に一盃に水二合入れて　三盃になるまで煎じたる汁を與へよとなり

九月廿七日　醫師の許にて　灌腸をなす
乳はやめる方よろしきも　中々むつかしければ徐々にせんと　晝夜にて四回位　他は麥汁のみにせよといはる。

九月廿八日　少しく風邪の氣味あり　機嫌惡し。
便通四回　色は青けれど水分少なく粘あり。

九月廿九日　母の傍によれば　乳をのみたがる故ばあやと春さんに　遊ばしてもらふ。

九月卅日　醫師は牛乳を用ひされば此後の發達に影響する所少からざれば是非とも試みよと言はれしまゝ　今朝七時頃乳二麥汁一の割合にして盃に二盃飲ませしに　喜びて飲む、異狀なし、午後三時に亦飲ませしに　喜びて飲みしも　五分ばかりして　皆吐き出す。
食を減じられ空腹の爲めに元氣少しく惡く余り下にて遊ばず　ばあやに抱かれたがる。
便通五回　色黑く粘あり。此頃より漸く衰弱の兆見え始めぬ。
食事　牛乳二回　麥汁四回、母乳一回

睡眠十一時間

十月一日　朝牛乳を飲みし時は　顔少し赤く眼のまわり紫がゝり　胸悪しき樣に見えしが吐かす夕方も　胸悪しき樣子見えたり。よく〳〵牛乳の嫌いな性質と見えたり。

便通二回　黑色少し薄し

食事　牛乳二回　麥汁三回　乳一回

睡眠　十二時間

十月二日　小原醫師に牛乳を試みし結果を　報告す　醫師の云はるゝには　此兒は牛乳のあはぬ質故　今少しく經過を見て　魚肉より滋養をとる事にせんと。但し牛乳を用ゐぬ故一時は大いに體量を減ずるものと承知せらるべしとの事なりし。

便通二回　黑く粘あり

食事　今日より薄き粥を二回與へ　其他は母乳とす

睡眠十二時間

十月三日　昨日父上に買つて頂きし　自轉車のおもちやを押してあるく。棒の尖に車と鈴と付きたるものにて歩き始めの幼兒が歩行方を練習するに宜しき玩具なり。

十月四日　朝の中は無事　母の不在中も　空腹の爲か機嫌悪し　母學校より歸りて乳を飲ます暫時にして　乳を吐く事二回　小原醫師の許へ連れ行く　醫師は特別の事もなし　只乳を飲み過ぎたるならん　今少し扣へよとの事なれば歸宅後も乳を與へず　麥汁ばかり與へしに又吐く　夜半に起きし時も麥汁のみにて眠らせんとしたるに　中々眠らず　母を見れば　乳を飲み

たがる故　母はかくれ　父起き出て　麥汁を飲ませ　眠らせんとすれど　泣きて止まず　ばあやも起きて麥汁を作り　飲ませしに　ぐい〳〵と飲み　漸く父に抱かれし儘眠る。

便通五回　粘あり、粒々の物あり、一回量多し

十月五日　朝醫師に行く　熱は卅七度五分　終日元氣なく　床に臥す　夜も熟睡せず

十月六日　朝より機嫌惡し

便通五回

食事　麥汁（三盃づゝ）四回　乳四回

十月七日　元氣なく終日機嫌惡し　下齒三枚になる　夜も時々覺めて泣く。

便通一回

食事　麥汁二回　乳五回

十月八日　機嫌惡し　夜乳を吐く　今日始めて魚肉を與ふ。他に營養分を取る道なき故、主として魚肉にて取らんとするなり。

便通　三回（乳のかたまりたる樣な粒々あり）

食事　乳五回　麥汁三回　粥、急肉（セイゴ）一回

十月九日　此頃の經過にて見れば　牛乳を用ふる事は　止めしにも拘らず　元氣なく　乳を吐きなどするは　母の乳質變りて　その爲なるべければ　母乳も斷然廢し　魚肉と麥汁と粥少しにて　養育せよと醫師は言はれたり。

便通一回

食事　麥汁六回　粥一盃、麥汁二盃魚肉少々三回

十月十日　氣分少しく宜しき方なり　全く乳を止めたる故なるべし。

便通二回　前日よりは宜しき樣なり粒なし

十月十一日　元氣少しく宜し

便通一回

十月十三日　食べたがる事甚し

便通三回　少しく粘あり水分多し

十月十五日　より廿九日頃までは毎日　仝じ容體にて　便通は一回或は二回　元氣は追々宜し。食事は魚肉一回の量三匁。種類はせいで、かれい、ひらめ、あまだい、こあじ、あいなめ等。粥酒呑猪口に三盃又は四盃、麥煎汁二盃にて晝四回　夜二回又は三回。近頃は歩く事も、這ふ事も全く已めて、たゞ元氣なく、抱かれて居るのみ。たゞし、空腹に迫る時は、マンマ〳〵といひつゝ、臺所の方に向ひ、力なき身體をいざりよせるのみ。生後一年五ヶ月許りなり

割烹

石井泰次郎

昔時の割烹の本の内で、記し方の可のを少しぬきまして、今の料理の筆記と合せて見るたよりに致します、

◎胡椒飯のたき方（こせうの名をきらいます地方では祝の粉と申してあります）

米一升に、胡椒の粉を小匙に三杯、醤油を小皿に一杯、一所にまぜまして、水加減をして、飯にたきます膳に組立て進めます時には、飯椀、汁はかつを煎汁、醤油からくないほどに加減して、青いきざみ昆布を短く切て入れまして、鴨頭には大根おろし、陳皮、蓼椒、山葵等を手鹽皿に盛て添てれぜんを進めます、

◎桔梗玉子の拵方

雞卵を煮ぬきまして、皮を去りまして、又湯の中

へ入れ、温かさ内に、箸を五方からあて丶糸で結んで桔梗の形にして、再び湯煮すると、内の黄身ともに花のかたちになります、柿玉子、ねぢり玉子にするのも同然であります、箸を五方にあてる時には、玉子をたてに布巾に包んでから、あてるのです、

◎白田樂の拵方

豆腐を、常の如く田樂にして、味噌と胡麻を油にてとかして、やかぬ豆腐にぬりて燒くのです、さうすると、味噌がこげないで、内へ火氣がよくとほります、

◎よせとつさか海苔の拵方

雞冠苔、洗ひて、湯煮を能くいたしまして、とけますのを、鹿毛篩で、こしまして、角の器へうつして冷して、細く切りまして、さしみに用ひます

◎鹽だこ潮煮の拵方

鹽だこを、能く洗ひまして、皮いぼともに庖丁刀で引去りまして、二つ三つつなぎに薄く切りまして、鍋へ何も入れないで、鍋をやいて、切た蛸を入れて、蓋をして、煮ますと鹽が出ます、そこで蛸をあげまして、蛸から出たしほを其まゝ用ひまして、水を加へて加減いたしまして、たこは別に煮ませんで、わたゝめて直に實につかひます、

◎信樂あへの拵方

午蒡を、庖丁刀で、さゝがきに細くけづりまして から、湯煮しまして、笊へあげて水氣を去りまして、山椒みそなどにて、あへて出します、

◎白梅酒の拵方

冬の内、白梅の數百ばかり、水に漬て一夜れさまして、内の匂ひを取去りて、瓣ばかりを輕き酒に

漬れます、酒一升に花びら百、雪の水少量入れまして、霜月中旬に仕込みましたのを、一月一日からつかひます、飲みます前に、絹漉しにしまして出します、

◎とろゝ汁温むる仕方

つくね芋をすりれろしまして、生栗を一つすり入れて、和らかに仕立てゝ鍋へうつしまして、暖めますと切れることがない、強くたくとねばりがつよくていけません、そろ〳〵たくのです、又いまり焼の茶碗を入れてあたゝむることもあります、

◎鱸の鮭焼の拵方

すゞきを三枚にれろしまして、身に鹽をふりかけて、酒につけておき、醤油をうすくして酒を合せだのをかけ〳〵焼きまして、ねり酒を上に引きまして照を見せます、

◎みかん膾の拵方

蜜柑の袋をうらがへして、十五六ばかり皿に盛まして、砂糖をかけて出します、

◎兵庫煮の拵方

ちひさき鱧の腸を去りまして、木口に骨ともに薄く切りまして、薄醤油で煮て出します、

◎苺子汁の拵方

生車海車の皮を去りまして、身ばかりを能くたゝき、擂盆にてすりまして、丸くちひさく取まして汁へ入れます、色赤く菓子のいちごのやうになります、

◎雲かけ豆腐の拵方

豆腐をよきほどに切りまして、米の粉にまぶしまして、蒸籠に入れてむしまして、わさびみそをかけて出します、器は茶碗でも、椀でもよろしい、

◎煮あへの拵方

大根をたんざくに切つて、湯煮しまして、胡麻みそ、生姜みそかたくつくりまして、大根の湯をすてまして、鍋へ右のみそを入れてあへます、

家庭に於ける所感（承前）

長野　飯塚忠次郎

又自分でこれは善良のものであると思ふてもよくよくぎんみして小兒に與へねばいけませぬ、そして小兒がいくら菓子が好きだからとてむやみやたらにいゝなりほうだいに多くわたへないようになさいまし、よく体育の如何を考へて身体の營養にさまたげない害のない程度をみはからつてあたへぬといけませぬ、御承知の如く小兒は何もかもむとんじやくに、たゝむやみと多くたべたがりますからそのへんの事柄は特にお小兒さんをおもちのかたに御注意をねがいたいことで之も家内衛生の一端かと思ひます。

九）幼兒と玩具

幼兒とは未だ學校に通はざるいとけなき兒童を指示するので、今私のお話しせんとするは、重に幼兒についての玩具の事で御座います、扨て幼兒と玩具とは甚だ密接な關係がありますから大に撰擇するの必要があるのです、然るを世の人々は此樣な事については御考へがうすいか淺いかそれはとにかく、工夫の巧なもの美しいものをのみ買求めて幼兒にわたへよろこぶのを以て御滿足としてゐられる、ブリキ製であれ、ガラス製であれ、なんでも幼兒のきにいるようなものを、買ひ求めてやるといふ風習があるように存じられます、幼兒

をよろこばし滿足させると云ふことは誠によいことでは御座いますけれども、其れで果して適切なる與へかたといふことができましようか、近來玩具の製方の術も進歩しましてなかなか巧尚になつてまゐりましたようなものゝ、然しあらゆる多くの玩具の中でことさらに指してこれがよいと申すものは誠に僅少で御座います、稍々生長した小兒には多くは見受けませんが、幼兒は一般に何にかれの區別なく口のうちに入れます、はたでみますと何がそんなにうまいのかしらと思れますが、幼兒の身にとつてはさほどには感じませんから、母たる人は幼少の者には背めては害にならぬ毒にならぬものをよく撰擇せねばなりませんです、そうでないとけがをしたり身体にさわる事ができますから、とくにブリキやガラスでつくつたものは

嚴禁したいと思ひます、當時世間で發賣して居ります玩具はどうでしやう、巧なものもありましやう、美麗なものもありましやうが、名もしれぬ赤青と種々樣々の彩色をしてかざりたてたものがありますが、これらは一考をようすべく、ごく危險なる品物と思はれます、幼兒には一般に色のつかないものを與へるのがなにより一番よかろうかと存ぜられますたとへどれほど美しくつても毒になるものはさけねばなりません、如何程巧尚に出來てゐてもあぶないものはいけません、世間幾多の家庭の家人たるものは大いに其巧拙美醜はさてをき、まづ有害なりや無害なりやといふ點についてて大いに熟考せられて、幼者にあたへてもきけんでないどくでないとみとめたうへで買ひ求めてやつてほしいのであります、何もかんがへないで徒に

虚美虚飾に走つてはなりません、之れ主婦たる者家人たる者のともに盡すべき當然のつとめと思ひます、それを世間の母親は幼兒があやまつてけがでもすると「お前はなぜそんなものをもつてをあすびだえ、それだからけがをするのですよ、之れからは決してそのようなものをおもちやにしてはなりませんよ」と、幼兒はたゞ「はい」といふて其きづぐちへくすりを母親につけてもらうのが常であるように思はれます。一寸さくと如何にも尤もなる事柄であるようにも思はれますが、よくよく推考していつたならばつまるところは皆な家庭の罪で御座います、買つてやつた人は勿論のこと、幼兒がもてあそんでゐたときはたの者のかんとくがたらないからです、かくのごときこと世間の家庭ではまゝ行れてゐるので、親たる人家人たるものゝ最も鑑みねばいけません、けがをしてから体をいためてから、あとでさわいだからとてをいつきません、それは丁度盗賊をみてからなわをなうようなもので何のやくにもたちません、それゆへ何事でも事の未だをこらざるまへに注意せねばなりません、即ち遠慮といふことが最も必要なことであります。

筆のついでに一寸ひとこと申したいたとが御座います、それは普通によくある事で幼兒が金錢なぞをおもちやにしてどつかのはづみで呑みこんで、泣くやら背をたゝくやらの悲劇を演ずることがないともかぎりません、私は現に二三度ばかりそうゆうことにであいました、これは母親の注意のたらざるの致すことで大に氣を付けていたゞきたいのです、決して金錢にかぎらず危險の品物はそこ

らに置かぬようにせねばなりません、貨幣は只にきけんなる品物なるのみならず乞食の手からも病人の手からもありとあらゆる人類の手から手へと旅行してまわりますもので、如何樣な人の手から來るかはかられませんから、誠にぶつそうせんばんの品物であります、これによつてみても貨幣のきたないことはあきらかで、衛生の上からみてもおもちやにさせてはいけないことはあきらかな次第で御座います。（未完）

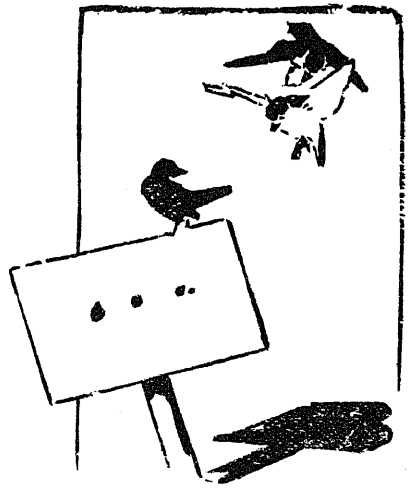
かゝる時さこそ生命の惜しからめ
かねてなき身と思ひ知らずば

各宮妃殿下御歌

大日本歌道奬勵會が忠烈歌集を編纂して陸海軍人に寄贈するの擧を聞召され兩内親王殿下及び各宮妃殿下より下賜されたる軍事に關する御歌を得たれば左に掲ぐ

常宮昌子内親王殿下

出征の兵士をみて



勇みたつますらたけをゝ見る度に
つゝかなかれと祈りこそすれ
出征の將卒を思ひ遣りて
くにのためいさむ心はもゆるとも
なれぬさむさに肌やこほらむ
旅順決死隊の行爲をきゝて
沈むべきふねに乘居て雄々しくも
みなとの口をふさきつるかな
陸軍の捷報をきゝて
御軍はかちわたりぬときくからに
先つこそおもへ益良夫の身を
昨日まで露のおきゐし城のうへに
朝日のみはた今朝なびくらし
雪のふりける夜
白妙にみゆきふり埋むからくにの

野べにふすらん人をしそ思ふ
春の歌の中に
花鳥のいろにも香にもなにとなく
こゝろとまらぬ春にもある哉
祝捷會の提灯行列を見て
國民のよろこひいはふもろこゑは
みやこ大路になりひゝきけり
周宮房子内親王殿下
出征の將卒を思ひ遣りて
浦安のくにをはなれていくさひと
ゆきにふすらむもろこしか原
紀元節の日に
御軍は日のもとつくにかちたりと
みたまも天にきこしめすらん
旅順閉塞隊の行爲をきゝて

鬼神も泣きぬへきかな身をすてゝ
　ふねを沈めし仕わさきゝては
　陸軍の捷報をきゝて
陸の仇うちしほまれは先きつ日の
　ふないくさにも劣らざりけり
　祝捷會の提灯行列を見て
ともしひを手にたつさへて國民の
　御代祝ふ聲のいさましきかな
　櫻を見て心に思ふことを
しきしまのやまと心のいさきよき
　名に匂はなんやまさくらはな
　燕の軒に巣くふを
みくいさのありとも知らて軒傳ひ
　のとかに遊ふつはくらめかな
夏のはしめに

冬よりもなほたへかたき夏はきぬ
　身をいたはれよ益良夫のとも
　閑院宮妃智惠子殿下
　日露戰爭につきて
ふないくさかちつゝきたる御いくさは
　くかにもあたをうちや盡さむ
　山階宮妃常子殿下
　折にふれたる
朝夕にかみにむかひてみいくさの
　かつことをのみ祈るころかな
我君はいくさにいてゝまこゝろの
　あらんかぎりを盡しますらん
　久邇宮妃俔子殿下
　廣瀨中佐の勇ましき戰死を聞きて
ものゝふのみちにちりにし櫻はな

いつの世までも香に匂ふらん
身は船とともに沈めてをゝしくも
あたのみなとをふさきつる哉

賀陽宮妃好子殿下
折にふれたる

御軍のたゝかふことにかつみれは
神もいてゝやまもりますらん
いくさ人つるきいよ〳〵とき磨き
しこのしこくさかり盡してよ

待旅順口陷落

今日も亦た鈴の音聞きてかのみなと
おちししらせを待ち渡るかな

雨中進軍

山みちにしのつくあめも物かはと
進むみいくさいさましきかな

遼陽の占領を祝し奉りて
うちつゞき仇のとりてを攻取りて
いとゝかゝやく日の御旗かな

伏見宮妃經子殿下
折にふれたる

とつ國の海路はるかにひゝくらし
わかみいくさのかちときの聲

梨本宮妃伊都子殿下
繃帶製造をなしつゝ

つゝとらぬ女なからもくにのため
なしえはかきり勉めてしかな

をりにふれて

日の御旗うらるの山に押し立てゝ
君か代うたふときは來にけり

後室北白川宮富子殿下

赤十字社にて繃帶をまきける時

白布にわかきこゝろをまきこめて
つなきとめはや人のたまの緒

出征の軍人を思ひやりて

いくさ人君かためとはいひなから
いかに寒さの身にはしむらむ

勝報をきゝて

かちいくさしらする文をみる度に
まつつはものゝ上をしそ思ふ

後室華頂宮郁子殿下

をりにふれたる

御軍にいさをあらはすものゝふの
つよきこゝろそ尊とかりける

久邇宮篤子殿下

水雷

四方の海に轟きにけりあたのふね
うちくたきつるいかつちの音

軍艦

日の本の國のまもりのいくさふね
かすそふ世こそ嬉しかりけれ

遠征軍をおもふ

君か爲とらふす野邊のゆきふみて
仇まもるらんますらをのとも

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖とたのみしひとり子も
家おもふなといましめにけん

騎兵

後れしとくつはみそろへ乘出す
駒のあかきのいさましさかな

待旅順陷落

かの港あたのまもりのかたくとも
攻め入らん日はほとやなか覽

雨中進軍

雨降りて暗き夜半にもいくさひと
あたのとりてに進み行くらん

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝそとて仇の守りしとりてさへ
わかみいくさの物となりにき

秋の夜

東くめ子

病める子のねもわながめてつく〳〵と
秋の長夜をふきあかしつる

和歌三首

湯川たき子

秋田

ゆたかなる稲葉の川中に袖ぬれて
身にしみ渡るあきの夕ぐれ

落葉

ふく風にあわとみだれてこずゑより
道もなきまで散る木の葉哉

千鳥

小夜ふけて波に聲そふ浦千鳥
ねさめて聞けば八千代とぞなく

和歌二首

志田なか

なく虫の聲をきゝても去年の秋
身まかりましゝ母をしぞ思ふ

きりたちてそことも分ぬ秋の野に
聲さやかにも虫のなくなる

はちす葉

（甲府魚町二丁目小林靜軒方すみれ會詩稿）

鶴丸千代子

月やどるこの白玉を蓮葉に
　天つ少女のいつ忘れけむ
朝には朝日をあて丶夕には
　霧ふきかけて蓮もる哉

（學校の妹より蓮を頼みおこせしかへし）

蓮園

行けよ行け我が敷島のますら雄が
　最後の平和作る此の秋

村松下枝

淋しげにふりしく雨の名殘とめて
　今日はれやらぬ中秋の空
父よ戀しち丶よ戀しとうたひつ丶
　十年の秋を夢と過ぎけり

（十月五日父君の十年忌にあたりて）

うきにつけやすきにつけて父君の
　いまさばとのみ偲ばる丶かな

伊藤うた子

吹くとしもえ知らぬ風に白梅の
　かをるか春の奥津城どころ

（人の頼みに任せて）

長谷川みつ子

皇軍の門出にせしが結びたる
　門の柳に秋の風ふく

跡部富士子

見わたしの田ごらはなみのれしなべて
　夕風さむし水のおとさびし
秋風のまゝになびける賤が家の
　煙もさびし夕ぐれの空

西川靜江

いくとせを郷の友ひとりはしなくも
語りあかしし秋の月きよさ

勇しくさかまく浪を分け分けつ
旅順港口いま行く帆かげ

青木とし子

月あかく虫なきしきる萩原の
はらのをち方尼ぬはす家

野口ふみ子

さよ更けてふみ讀む窓に聞ゆなり
秋をさびしさ男鹿の聲

秋山きん子

賤の女が糸くる小屋の夜のまどに
人まつ虫の聲あはれなり

長坂末子

あづさ弓やはたの神に祈らまし

軍さ幸あれ吾が兄吾が友
日の本は神まもる國花の國

進むいくさにかちどきつゞく

春の舍

かゞやきの海を染めつゝ昇る日の
色にもまさる大和國民

さた子

村雨よいたくな降りそ我が庭の
眞萩しら萩しほれやすらむ

白ふぢ

甲斐が嶺の出版をきゝてたゞに嬉しく

いく度か折りてすてけむ似非歌の
筆またとりつ甲斐がねの月

梨子

道のべを馬にふまれてひめゆりの

匂ひわせてけり花逝きてけり
みどり

夏草の中に一もと選まれて
み座美しき姫百合の花
みぎは

降りしきる雨もをやみて光みつ
庭にいとしのさ百合一本
さくら

うるさしとさわぎしあめもいつかやみて
小窓のあたり光さやけし
しら桃

大空にかゞみと見えてすみ渡る
かげさやかなり月の小波

賎が家のま垣さびしく一本の
ひともとさびし白菊の花

そよ風にちり行く一葉ながめては
なほしのばるゝふるさとの秋
撫子

野の末を一人さびしと見えにけり
誰をやまねくをばなほすすき
山吹

なき父の奥津城訪ひし折からに
あはれを添ふる鐘の夕暮
萩子

來て見れば手向けてありし白菊の
誰が心根か嬉しかりけり
春子

萩の葉のそよぐ音さへ聞えきて
心地さやかなり秋のはつ風
いま子

秋風の音さへさむくなりにけり
　夜すがらゆらぐ庭のいと萩
夕闇を白き窓掛さとゆれて
　風にひとしきり琴の音きこゆ
今宵また友がみ墓に物いひて
　暫しの夢を忍びて泣きぬ
今宵照るこの月影よ永久に
　さへぎる雲のそれなかりせば
霧に遠くとほく霧の影さえて
　夢山わたりたいほの暗さ
秋風にやがて行かむず水草の
　つねを
　幸にも似たりわが身いく年
こゝを夕暮母やいとしの海路山路
　れぼろの果てに夢とゑがきつゝ

枯れ〳〵の虫の泣く音にあこがれて
　月いづる頃を一人さ迷ふ
人の植ゑし花も枯れたり人の濯きし
　水も涸れたり今日この夕暮
面かげを草にゑがきてしまらくを
　香の烟にわはれ咽びけり

フレーベル會俳句端書集

一、課題　冬季雜吟　一人十句以下
一、締切　十二月二十五日限り
一、披露　明治卅八年二月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には美景を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨意）

住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第五回俳句端書集

樣々の家例もあるや夷講　長野　飯塚曉霞

水仙に星の影さす小庭かな　同

旅衣の幾年振りや鉢叩　同

したゝかの密柑投げゝり夷講　東京　平岩學洋

木に金のなつた話や夷講　同

荒磯や今出た月に啼く千鳥　同

仙臺の角錢も出て夷講　仙台　立花一瓢

消え殘る焚火の淋し啼く千鳥　同

松風に憂き旅を知る千鳥哉　陸奥　須藤美佐

秋刀魚るかけ聲高し夷講　東京　松の舍

水仙や白きが中に黃なる色　同

分りにくき經の文句や鉢叩　同

漁火に年の懺悔や啼く千鳥　尾張　田中松窓

日當りや佛師が庭の水仙花　同

水仙や机の上の四書五經　同

頬杖に目を休めけり水仙花　神田　松本のり

水仙や窓を明ければ鳥の立つ　埼玉　會田松聲

日に近き机の上や水仙花　同

荒磯に星の光りや啼く千鳥　羽前　門地いち

舟宿に縮まつて寢つ啼く千鳥　大分　阿部喜久

煩惱の慾は忘れて鉢叩　同

貧寺や山茶花散て雨多き　本郷　櫻井とみ

月落ちて客の戻りぬ夷講　堺市　原田まさ

山茶花の日蔭に咲くや花稀に　福岡　遠藤眞水

山茶花に大根干したる日南かな　小石川　平野さだ
鉢叩淋しき町を後もどり　同
沙婆に迷ふ人の多さよ鉢叩　長野　黒田玉水
椽側にカナリヤ籠や水仙花　大阪　松風庵
鉢淺く水凍りけり水仙花　同
筆筒に孔雀の羽や水仙花　同
千鳥啼く月影細し磯の松　群馬　松島松聲
波音は別に聞えて啼千鳥　同
山茶花や裏の境もなき住居　同
山茶花にふと目のとまる藁屋哉　京都　鈴木久能
福相な主人の顔や夷講　町田せん
尼寺の障子古びぬ水仙花　同
松風に聲絶々や小夜千鳥　同

三光

天、藪陰の水仙寒き蕾かな　須藤美佐

地、小雨降る入江に淋し夕千鳥　飯塚曉霞
人、生臭き路次を出でたり鉢叩　立花一瓢

追加　無一庵奇零

主従皆一座になりて夷講
長生の耻語らへぬ鉢叩
面白き後ろ姿や鉢叩
四君子に耻ぢぬ操や水仙花
山茶花や盛り過ぎたる庭の寂
明星の江越しに見えて啼く千鳥

新聞紙に見えたる子供の記事

▲女子と兒童の敎育　女子は、細かな點に氣がつくから兒童を育てるには、至極適任のやうに思ふけれども、其實左樣でなささうです。兎角子供は、女の手にかけぬが一番よろしいらしい。殊に男の子は、其樣に思はれます。それで保姆を七八歳の男子につけるは、其子の身心を弱くさせ、面白からぬ性質を增長さする弊害があります。此點は學校と家庭との方で深く注意した方がよからうと存じます。一言で申しますと男子は早くから躾の善い子供と一處に男の中に置くのがよいと思ひます云々。

▲子供の手の使ひ方　小供が發育して漸く兩手に物を取るが爲に使用し得るに至るや、右手を多く用ゐるか或は左手を多く用ゐるか或は又兩手を用ゐるかと云ふ事につき、米國の有名なる心理學者バルドウキン氏は自分の子供の生後五ヶ月より九ヶ月の間に調べたる結果は物を取る爲めに兩手を出せし事千〇四十四左手を出せし事五百八十六回右手は五百七十七回なりしと云ふ

▲歐米の子供の子供然たらざる事　人或は日本の子供の繪畫は子供らしからずして、成人の小なる者也と云ふ、然り左れど一度歐米に至つて子供を能く觀察すれば、日本の子供の繪畫の成人らしきよりも更に一層成人らしき子供あるに驚かざるを得ず、其身體其聲音等は幼稚なる年齡を代表し居れども、手つきと足つきとに至りて其年齡は相應せざるもの甚だ多し、例へば十歳ばかりの兒童が指一二本にて頰杖をつき或は兩手を後ろに組む

等又直立し居る時には足に一種の樣子を附する等成人の動作と全く異る所なきものなり、歐米のうち殊に佛英米の順序に此種の兒童多く、獨逸露西亞に至りては甚だ少なし我國に於ては東京の中央にも決して未だ斯の如き兒童は存せざるなり、歐米の子供の繪畫か實に能く子供の愛らしさを寫したるを以て、歐米の子供か全體斯の如く子供然たる愛らしき者と思ふは大なる誤なり

▲子供について獨佛の差　一國の盛衰は其國民か子供を厄介物にするとせざるとの狀態によつて卜する事を得べし、獨逸にては先つ一般の風習として四人又は五人の子供を有するは人たるもの、普通の事となし、それ以上の多くの子供を壯健に養育するを頗る自慢とす、然るに佛國にては寧ろ子供のなからんをを希望し或はたゞ一人或は二人の子供を有するを以て一般となしそれ以上の子供を養育するは一般の人の最も好まざる所なり、以つて此兩國の盛衰を知るを得べし

菜食の功

▲ベルッ博士の菜食論　醫學の泰斗として殊に我國民の體質に就て研究を遂げたるベルッ博士は數年前よりして日本步兵は歐洲最良の步兵よりも優勝を占む可きをを確信し、且つ其理由を菜食に歸したり、博士の說に依れば肉食する人は窒素分過多なる爲め、耐久力を有せず、現に駈足又は登山等に就て日本人の疲勞せざるは菜食の賜なりと、博士は北淸事變の際は自己の所信を確むる好時機とし、仔細に觀察したるが、歐洲兵は一として日本步兵の耐久力に抵抗し得るものなかりしと

云ふ、又今回の日露交戰に際しても博士は日本歩兵の必ず露國歩兵よりも體質上より優勝なるべきを豫言し居たりと、因に博士は赤城登山を試むるに際し數日間菜食して其耐久力を自驗したる事あり〳〵云ふ

編輯局より

▲春すぎ夏去り秋來つて、遂に年の暮は來り申候讀者諸姉諸君、いよ〳〵御清適、先は目出度存じ候。何がさて、筆硯多忙、思ひなからも御無音にうちすぎ、其申譯までに、久々にて一筆啓上仕り候。

▲新聞紙にて既に御承知の事と存じ候へども、女子高等師範學校生徒監、山川二葉刀自には、先般辭職致され候。御存じの如く、刀自は明治十年より、生徒監として、今日に至るまで其間二十七年の久しき、寄宿舍訓練の任に當られ、詢々として倦まず撓まず、身を以て生徒を率ゐ、實に本邦女子訓練の範を與へられ候功は決して沒すべからず、今回御老體の故を以て職を辭せられ候に付きて、仝校長も深く惜まれ候由に候へども、事情致し方なかり候にや遂に、其職を免せらるゝに至り候、而して其際特旨を以て位二級進められ、尙ほ先月、

▲仝校教授　飯盛氏の勅任に榮進せられ候に付き刀自の送別會と兼ねて祝賀の會を、職員一同にて開かれ候時分校長はかねて久保田文部大臣より、刀自に向つて送られし感謝狀を、朗讀致され候由。左に其書狀を寫して御覽に入れ候。

貴下が明治十年初めて職を女子高等師範學校舍

監に奉ぜらるゝや本邦女子寄宿舍の制度猶草創に屬し該校寄宿舍の良否は將來に於ける女子寄宿舍の發達に至大の影響を及ぼすべき時にして其任たる頗る重大なりき而して貴下此重任に膺り能く學校長を助け奮に泥まず新を趁はず以て今日の發達を見るに至らしめ延て全國の女子寄宿舍をして矜式する所あらしむるに至りしは其功勞大なりと云ふべし實に貴下が該校創始の際より今日に至るまで二十有七年の久しき終始一日の如く其職務に勵精し至難なる女子教育に貢獻せられたること多きは以て他の模範と爲すに足る今や貴下老體の故を以て其職を去らるゝも貴下の培養に成れる燦然たる美果は永く女子高等師範學校の寄宿舍に存すべく貴下多年の勤勞は報ゆる所ありと云ふべし本官は茲に一言を贈り謝意を表す

▲貴下、明後二十九日は、同校設立開校紀念式擧行の由に候。仝日は前面の附屬高等女學校運動場を會場にわて、仝校及附屬校園生徒兒童幼兒を集め尙在京の仝校卒業生をも招待可致候由、今回は第一回のをとて、隨分盛なるべきかと存じ候。尙仝日午後よりは如蘭會の總會も可有之由、當日は其他尙生徒間にさま〳〵の催も可有之と存じ候、何れ他日御報導の機會も可有之と存候。

▲來年四月入學せしむべき本校生徒各科に二十五名はもはや募集すみと相成り候。本月中旬には附屬幼稚園及小學校の幼兒生徒の募集可有之と存じ候。因に申上候。來年度より入學又は入園すべき生徒幼兒に對しては、それ〳〵月謝を引き上げ、高等女學校は貳圓五十錢、小學校第一部は貳圓、幼稚園は壹圓五十錢と相成るべき由、事局い影響かと存じられ候。

▲先月及先々月は、運動會の好時季として、當市の各女學校とも、隨分盛に催し有之候。然も、小生

の見る所に由れば、追々、華美に流れ、何やら、一般の糊覽物、見せ物的に流れたるやの傾有之候は、一考を要すべき事ならずやと思はれ候。

▲何かと申し居り候中に、烏兎早々、本年も既に餘日之なく相成り候。本誌も微力ながらも、こゝに第五歳の齡に達し候へば。更に一層の奮勵を以て斯道に盡瘁致したき覺悟に候。先は之にて擱筆可仕、餘は永陽の時を期し候早々。(十一月廿五日)

新刊紹介

▲英學生　月二回發行　發行所　東京小石川區小日向臺町三ノ七二東西社

初歩の英學研究者に實用的英語の練習を指導する雜誌で、何しろ一部定價二錢五厘といふのだから非常の評判である。中は詳しくも言ふには及ばぬ。廉價で、面白くつて、實用的で、よく出來た雜誌だ、編輯者は、萬朝報英文欄擔當の山縣氏と斯波氏とである。

▲運動會　月一回發行　發行所　下谷區谷中一日本遊戯調査會

其名の示す如く運動普及の目的で、先月新に生れた雜誌で、定價も僅に三錢五厘といふ廉價であるが、夫にしては、中々よく出來て居る、いろ〳〵遊戯の面白いのもあり、挿繪も惜氣なく這入つて居る。だん〳〵遊戯、運動の奬勵せられる今日、吾人は其健全な發達を祈るのである。

▲幼稚園掛圖　一輯六枚　發行所　大阪東區島町一ノ九三天眞堂

幼稚園保育には、何をやるにつけても繪畫が必要なのであるが、これまで、特に幼稚園の爲にとて出來た掛圖がないので、或は小學校の修身用いで間に合はせたり、又は不充分ながらも、各自でこしらえたりして居たのである。然るにこの掛圖はこの缺點を補はん爲に態々出來たので、金太郎に舌切雀に、浦島太郎に、兎と龜、兵卒と看護婦、朝顏の花の六枚一組として居る、これは、大阪の幼稚園の先生方のいろ〳〵工案の末に出來たとい

ふことで、うち見た所、中々注意がよく屆いて、繪も頗る見事に可愛らしく、全く幼稚園に適する樣に出來て居る。そして、談話の時にも、唱歌の時にも、手技の時にも使用の出來る樣にしたのは著者の苦心した所であらう。か樣な掛圖は、たゞに幼稚園に必要な丈けでない。どこの家庭に於ても、少しく子供の敎育に注意する人は、皆一部求めて置く必要があらうと思ふ。定價は六枚で貳圓五十錢、送料が十五錢である。尙之に說明書かついて居る、定價は十錢、敎育上繪畫の價値がら、右の掛圖の使用につきての注意を書いて居る。一讀の價値はある。

▲桃太郎合戰遊具　發賣元　東市本郷湯島六丁目五いわしや分店

これは書物ではない、東京の追分小學校長乙訓氏の考案に成つた玩具である。鐵の臺のついた桃を置いて置いて、赤と白との球を持つて二組に分れて、其桃について居る旗を目かけてうちつける、そして、其球が甘く當ると、桃がパッと二つに分れて、其中から桃太郎が、ヌックと出る仕掛けなのである。桃もよく出來て一見眞物の樣である。之に甲乙二種あつて、甲種は三圓で乙種は二圓五十錢、球が一打十五錢、幼稚園だの小學校の初年級の玩具として、最も適當した新案のものだらう。尙、小學校の運動會などで、今迄行はれた達磨こかしの代はりとしても宜しからうと思はれる。

入會轉居會費領收

入會

下谷區谷中初音町四ノ一三四　紹介者中村五六　酒井冬子

福島縣筑紫郡住吉村大字春吉四五一　紹介者東　萩野政太郎

本郷區湯島六ノ五　紹介者中村五六　岩本金太郎

日本橋區靈岸島町ノ六　福田吳子

日本橋區本町三ノ二　岩本藤吉

神田區山本町二十七　加藤花子

淺草區元鳥越町二、　藤田直吉

本郷區湯島六ノ七　岩本芳子

以上紹介者岩本金太郎

府下北豐島郡高田村金乘院內　事務所中込　志田ナカ

茨城縣立水戸高等女學校寄宿舍
千葉縣東葛飾郡福田村三尾
本所區林町三ノ四十六

小峯くり
紹介者松村久
海老原万次郎
事務所申込
石川かね
事務所申込

轉居

四ッ谷區坂町八十二大林一之方　吉岡美島
栃木縣安蘇郡葛生町葛生　石川石
岩手縣膽澤郡相去村字六原小學校　中村しん
京都府立第二高等女學校　赤穗千春
韓國仁川幼稚園　太田ため
同　仁川港清國居留地　吉川愛

會費收入

自明治三十七年十月廿五日
至仝　年十一月廿四日

金額	年月	姓名
八〇	三七、五—三七、一二	里田定治
一二〇	三七、四—三八、三	關千秋
六〇	三七、七—三七、一二	高野千代
四〇	三七、九—三七、一二	小野義倫
五〇	三七、六—三七、一〇	藤岡とき
一〇〇	三七、三—三七、一二	赤星千代
五〇	三七、八—三七、一二	脇谷しげ
	三七、一〇—三八、二	立花せん
一二〇	三七、四—三八、三	村上先
一〇〇	三七、三—三七、一二	打越じう
一〇〇	三七、二—三七、一一	神代まさ
一〇〇	三七、四—三八、一	吉澤幸
三〇	三七、九—三七、一一	平塚貞
二〇	三七、九—三七、一〇	重田ふぢ
二〇〇	三七、九—三九、四	萩野政太郎
四〇	三七、七—三七、一〇	岡澤やへ
三〇	三七、七—三七、九	外山茂
三〇	三七、七—三七、九	柴田かつ
五〇	三七、九—三八、一	八田さだ
四〇	三七、九—三七、一二	長澤さく
一〇〇	三七、六—三八、三	里村なほ
一〇〇	三七、七—三八、四	下田次郎
一〇〇	三七、五—三八、二	塚本るい
一二〇	三七、八—三八、七	安田倫
一〇〇	三七、九—三八、六	林富美
八〇	三七、四—三七、一一	木村一千代
七〇	三七、五—三七、一一	阿知和早苗
六〇	三七、一一—三八、四	志田ナカ
一八〇	三五、七—三六、一二	小幡たみ
五〇	三七、一一—三八、三	原しゅん
五〇	三七、七—三七、一一	奥田誠一
六〇	三七、一一—三八、四	岩本藤吉
六〇	三七、一一—三八、四	福岡吳子
六〇	三七、一一—三八、四	加藤花子
六〇	三七、一一—三八、四	藤田直吉
六〇	三七、一一—三八、四	岩本芳子
六〇	三七、一一—三八、四	岩本金太郎
一二〇	三七、三—三八、二	大賀ふく
一〇	三七、一〇	富岡龜門
二〇	三七、九—三七、一〇	鳥居鈜三郎

佐方しづ	三七、七—三七、八	二〇
南摩まさ	三七、九—三七、一〇	二〇
山口酉三郎	三七、九—三七、一〇	二〇
堀越源二郎	三七、九—三七、一〇	二〇
石川いし	三七、七—三七、一一	六〇
小峯たくり	三七、一一—三八、八	一〇〇
湯川たき	三七、一一—三八、一	三〇
廣瀬銀	三七、七—三八、六	二〇
間入たね	三七、一〇—三八、七	一〇〇
田淵みす	三七、五—三七、六	二〇
山下ふさ	三七、一〇—三七、一一	二〇
土方ささ	三七、一〇—三七、一一	二〇
藤井とよ	三七、一〇—三七、一一	二〇
田副つる	三七、一〇—三七、一一	二〇
鈴木たぎ	三七、一〇—三七、一一	二〇
酒井たね	三七、一〇—三七、一一	二〇
渡邊のぶき	三七、一〇—三七、一一	二〇
高松よぶ	三七、一〇—三七、一一	二〇
井村重代	三七、一〇—三七、一一	二〇
齋藤能婦	三七、一〇—三七、一一	二〇
藤谷いわ	三七、一〇—三七、一一	二〇
岩田ゆき	三七、一〇—三七、一一	二〇
内田たね	三七、一〇—三七、一二	八〇
鈴木やう	三七、一〇—三七、一二	二〇
尾村あい	三七、一〇—三七、一二	二〇
常川とよ	三七、一〇—三七、一二	二〇
益田一枝	三七、一〇—三七、一二	二〇
山本るい	三七、一〇—三七、一二	二〇
牧あさを	三七、一〇—三七、一二	二〇

赤間よね	三七、三—三七、一二	一〇〇
海老原萬次郎	三七、一一—三八、一	三〇
野津敏江	三七、六—三八、五	一二〇
町田則文	三七、九—三七、一〇	二〇
下村三四吉	三七、九—三七、一〇	二〇
大羽ひさ	三七、九—三七、一〇	二〇
矢作てつ	三七、九—三七、一〇	二〇
小池みつ	三七、九—三七、一〇	二〇
西島富壽	三七、九—三七、一〇	二〇
今立裕	三七、九—三七、一〇	二〇
槙山榮次	三七、九—三七、一〇	二〇
竹島萬郎	三七、九—三七、一〇	二〇
柳井つる	三七、七—三八、四	一〇〇
石川かね	三七、一一	一〇〇
石山けい	三七、二—三七、一一	一〇〇
鳥海じゅん	三六、七—三七、四	一〇〇
高田萬壽節	三七、四—三八、三	一二〇
林	三六、六—三八、一	二〇〇
三須とし	三七、七—三七、一二	六〇
下田鶴	三七、九—三七、一〇	二〇
武井綱枝	三七、九—三七、一	二〇
田邊春	三七、九—三七、一一	三〇
小出末三	三七、五—三七、一二	八〇
中村五六	三七、九—三七、一〇	二〇
喜多見佐	三七、九—三七、一〇	二〇
武田錦成	三七、九—三七、一〇	二〇
伊藤	三七、九—三七、一〇	二〇
尾田けい節	三七、一〇	一〇
加藤	三七、九—三七、一〇	二〇

二〇	三七、九―三七、一〇	吉村千鶴
二〇	三七、九―三七、一〇	立花はる
二〇	三七、九―三七、一〇	斯波やす
二〇	三七、九―三七、一〇	新井博次
四〇	三七、八―三七、一一	市原すみ

會告

▲年末に迫り會務整理の都合有之候に付き會費未納の方は至急御納付相成度候。

▲來る一月發行の本誌に掲載すべき玉稿は必らず本月十五日までに御送附下され度候

フレーベル會

フレーベル會規則

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スベシ

第五條　令閨名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一　總會　毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選擧等ヲナス　會員ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ

一　常會　毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一　組合會　會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一　雜誌發行　毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

一　前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人　會務ヲ總理ス

主幹　一人　會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　十人　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干人　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條　主幹ハ會長ノ特選トス

第十條　幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條　評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ

第十三條　此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ス

御注文の節は本誌廣告御覽の旨御附記を乞ふ

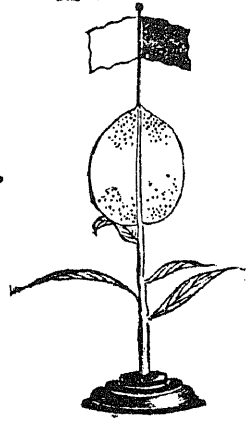
◉新案桃太郎合戰遊具廣告◉

高等師範學校附屬幼稚園主事
フレーベル會主幹
日本体育會體操學校長
日本兒童研究會幹事
日本女子大學校教授

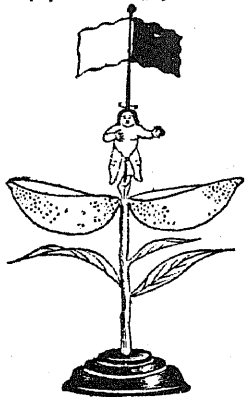
中村五六先生賛成
高島平三郎先生賛成

登錄出願中

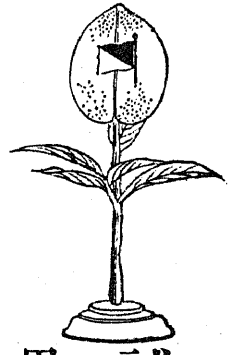
甲號全型



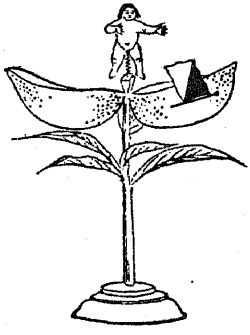
全開キタルル圖



乙號全型



全開キタルル圖



此遊具は多年兒童遊戯に就きて研究せらるゝ東京市追分小學校長乙訓鯛助先生の考案に成れるものにして不肖愚に先生の校に於て兒童に實驗せらるゝを親しく拜見し亦御寓見を承るに小學兒童特に幼稚園兒童並に家庭遊戯として最も興味を與へ其活働を促し且つ從來の遊戯と異り視點を遠方に注ぐを以て近眼等を矯正するに最も効益あり教育上甚だ有益なる物と思惟し先生の承諾を乞ひ茲に汎く世に發賣せんと企て諸先生の賛成を仰ぎたる次第なり兒童体育に關係の諸彦續々御購求の榮を賜わらん事を乞ふ

試用說明書附

甲號 球五個付 金三圓

乙號 全 金貳圓五拾錢

球壹打ニ付 金拾五錢

理化學器械
博物學標本
東京市本郷區湯島六丁目五番地
舗
岩本金太郎
しわい屋店分

御注文の節は本誌廣告御覽の旨御附記を乞ふ

會員募集

研成會規則（摘要）

一、本會の目的は主として小學教育の實際を研究し、以て之が改善を謀り、併せて教育者に研究の資料を供するに在り。

一、本會は前項の目的を達せんが爲め、毎月一回機關雜誌「教授界」を發行し、又講師を聘して、實地授業會を開き、學術其他の講習會を開くものとす。

一、本會の目的を贊成するものは、何人と雖も會員たることを得。

一、會員は會費として一ヶ年金一圓五十錢を前納するものとす。但都合に依り、左の如く分納せらるるも妨げなし。

半ヶ年分金八十錢、三ヶ月分金四拾貳錢、

東京市内の會員に限り、毎月に分納せらるゝも差支なし、此場合には毎月金拾四錢五厘づゝとす、

一、會員たらんとするものは、住所姓名を詳記し、所定の會費を添へて本會事務所に申込まるべし。

一、會員には左の特待法を設く。

一會員にして、教員就職又は、教員雇聘希望の者は　其の依頼に應じ一回に限り四拾字以内無料にて教授界誌上に廣告を爲すべし

一會員及その子弟にして、上京修學せらるゝ場合には、其照會に應じ、學校の種類、學科程度、就學手續等を詳報すべし。

但此の場合には、返信料を添へらるべし。

一會員より、講習會講師の招聘等に就き依頼せらるゝ場合には、懇切に紹介の勞を執るべし。

一會員にして學事視察、又は學校參觀、若くは學業講習の爲め上京せらるゝときは、宿所其他に就き充分の便利を與ふべし。

但し此場合には、前以て通知し置かるべし。

東京市麹町區飯田町四丁目拾貳番地　研成會

唱歌及遊戯教材提要

定價金參拾五錢

上編――遊戯法二千五余種（競技、表情、行進、体操、舞踏に分ち學年學期に配當し）

唱歌六百余種（學年學期に配當し）遊戯書を悉く擧げ唱歌書（文部省撿定）をも悉く紹介す

中編――斯界實際大家の教授法注意を掲ぐ

下編――遊戯の隊形七十法、新遊戯法四十種

本書は遊戯及唱歌界に現はれたる悉くを擧けて一目其方法を知り得る便覽なり熱心なる教育者は是非一本を備へらるべし、之を備ふれは材料は眞に無盡藏なり。

東京市麹町區飯田町四丁目十二番地

教授界發行所　研成會

●幼稚園恩物

右は昨年一月の開業に過ぎざるも御蔭樣にて追々繁昌仕り忝く奉謝候尙今後とも御愛顧御引立被下度宜敷御願申上候

▲品質は先輩諸店の恩物より優るとも劣ることなし
▲代價は世間一般のものよりは餘程低廉なり
▲顧客に手數と費用とを懸けざる樣十分注意す
▲他店に有らざる繪入積木、板挿、貝排べ、砂遊び、花形貼紙等を販賣す
▲保育の普及を圖るには成る丈冗費を省くの要あり弊店此點に最も注意す

●幼稚園掛圖

談話、唱歌、手技、兼用、全六枚
定價貳圓四拾錢小包送賃拾五錢

說明書添付

幼稚園用としては是迄修身庶物の談話に供する掛圖すらなく尙更手技又は唱歌の掛圖なる者あらざるを以て保育上頗る遺憾に有之候處弊店此度某々敎育家の御勸めに從ひ試みに右掛圖を製し保姆諸賢の御參案に供し申候

▲此圖は例へば(一)金太郎の圖を示して金太郎の勇武、慈愛、孝心、健康等、修身に關する談話を試み次に猿、兎、熊、鹿及び草木に就て庶物の問答をなし幼兒をして掛圖よりて充分の趣味を感ぜしめ終りて(二)金太郎の唱歌を歌ひて更に德性を涵養し美情を育成し必情を快豁ならしめ後(三)繪入積木を各兒に與へて隨意に金太郎の繪畫を組ましめ(繪入積木は第三恩物より成るもの、但し之を幼兒に與へざるも不可なし)或は恩物本來の趣旨に從ひて各樣の形體を構造せしむる類なり

▲印刷は最も美麗にして幼兒の眼を悅ばしむる樣なせり
▲用紙は摸造鳥の子二百斤を用ひたり堅牢他に多く類無し
▲製本は一枚毎に木片を兩方より打合せあれば揭ぐるに最も便なり

●兒童敎育に於ける繪畫の價値

全一冊定價拾錢郵稅貳錢

(幼稚園掛圖の說明)

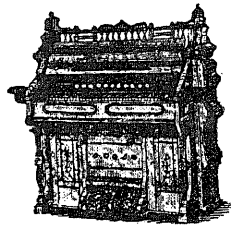
右は兒童を敎育するに繪畫が如何に必要缺く可らざるものなるかを解き併せて談話の時手技の時唱歌の時等の繪畫使用法を說明致候書物に有之保姆諸賢は素より人の母姉は必一本を備へて兒童の敎育を全くさるべきものと相信じ候

發賣所　大阪市東區島町二丁目九三　天眞堂主人謹白

(婦人と子ども第四卷第十二號)
(明治三十七年十二月五日發行(毎月一回五日發行)

山葉製風琴ハ第五回内國勸業博覽會ニ於テ第一等賞牌ヲ受領セリ

●山葉製風琴



壹號形	金拾六圓五十錢
貳號形	金拾六圓
三號形	金參拾七圓
四號形	金四拾參圓
五號形	金四拾五圓
六號形	金五拾八圓
七號形	金六拾五圓
八號形	金七拾五圓
九號形	金百貳拾圓
十號形	金百參拾圓
メーソンモデル	金百五拾圓
第壹號	金百貳拾圓
同第貳號	金百拾圓
同第三號	金貳百拾圓
同新形第一號	金四拾五圓
同第二號	金拾五圓
足折形一號	金廿五圓
同二號	金參十五圓

●山葉製洋琴　參百圓以上。各種
●舶來洋琴　參百圓以上參千圓。各種
●舶來風琴　百圓以上千五百圓。各種
●鈴木製ヴァイオリン
五圓以上五十圓迄各種
其他弓箱附屬品等各種
●舶來ヴァイオリン　各種
●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器新着品　各種

右の外手風琴バーモニカブラジョーレット各樂器附屬品各種郵券貳錢御送付あらば美麗なる目錄進呈す

北村季晴先生作

叙事唱歌

第一篇　須磨の曲
第二篇　離れ小島
第三篇　露營の夢

美麗洋裝大本
各壹冊定價金貳拾五錢郵税金六錢

本書叙事唱歌は、曾て閑院華頂の兩宮殿下並に兩妃殿下の御前に演ぜられて、好箇の日本的小歌劇との御讃辭を賜りたる新式の聲曲にして、和洋兩樣の樂に通達せる北村先生が彼我音律の長を採り、巧に構想せられたるもの、第一篇須磨の曲は一の谷の合戰を叙し、嫻雅なる平家の公達、質直なる東國武士の面影、今眼の前り見るが如く、第二篇離れ小島は、壯絶なる某海の海戰を述べ、座ながら實戰に臨むの思ひあり、第三篇露營の夢は、凄然たる荒野の夜半、征人望鄕の夢忽ち破れて、劇烈なる大夜戰の演出さる、樣を編みたるもの、遠征將卒の艱苦忍ばれて、儒夫も爲に起つの概あり、本書はまた其内容の美に加ふるに、某知名畫伯の靈腕を揮はれたる名畫を以て其表紙として錦上更らに花を添へたり、彼の千篇一律の唱歌又は軍歌に厭ける世の青年諸士は、速に一本を座右に備へて、永くこの天來の好曲調を賞翫し玉へ、

◎東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社樂器店　電話新橋五二九番　電信略號キヨ　◎